

幼 兒 教 育

第 三 十 九 卷 十 月 號 第 十 號



東 京 女 子 高 等 師 範 學 校 內
日 本 幼 稚 園 協 會

倉橋惣三編 (新刊)

新體幼稚園唱歌

四六倍判
定價(送料共)
金七拾錢

目 日本的旗日の丸の旗
次 道 ぶ し ん
倉橋惣三 作曲
倉橋惣三 作詞
井上武士 作曲

いうびんやさん 倉橋惣三 作曲
弘田龍太郎 作曲
渡し場の船頭さん 倉橋惣三 作曲
中山晋平 作曲
火消しのちびさん 倉橋惣三 作曲
小林つや江 作曲

日本幼稚園協會編 (新刊)

幼稚園新唱歌

四六倍判
定價(送料共)
金五拾錢

目 め だ か
次 雨
山松耕輔 作曲
山松耕輔 作詞
杉山米子 作曲
小松耕輔 作曲

ほ た る
ふ し ん 場
青山綾子 作曲
小松耕輔 作詞
小原銀 作曲
小松耕輔 作曲

○この二つの新刊幼稚園唱歌集は、幼稚園の爲に新しい歌曲を求めて居らるゝ方々に必ずや充分歓迎せらるることを期待してゐる。

六六二七一 京東替振

會協園稚幼本日

五三町塚大・川石小・京東
内園稚幼屬附師高女京東

草川 信・坊田かずま 兩先生編
唱ひ方の附いた

(新刊)

新幼稚園唱歌

四六倍判美本
定價金八拾五錢
送料 金拾二錢

可愛い幼児の唱歌として又子女を愛する「母の歌」としてこの美しい御本を皆様に薦めいたします。各幼稚園各家庭から續々御注文を頂いてゐます。

草川先生作曲 タンポポ(中村雨紅)夕焼小焼(同上)ヨロヒムシヤ(河井醉名)ままご(濱田廣介)舟遊び(野口雨情)夕立(濱田廣介)波のりあそび(同上)ナツヤスミ(河井醉名)おもちゃの舟野口雨情子ねこの目(濱田廣介)ジャンケンボン(野口雨情)山の兔(濱田廣介)おはやう(同上)だるまさん(野口雨情)花咲爺(同上)

坊田先生作曲 わたしの幼稚園(三宅のぶ子)赤ちゃん(同上)鯉のぼり(達崎龍二)遠足(三宅のぶ子)子雀おや雀(相馬御風)七夕まつり(渡邊千秋)お早やう(三宅のぶ子)可愛い兔(同上)飛行機(同上)ドナタの細道(同上)千代田のお城(野口雨情)正月來い(三宅のぶ子)ひなまつり(渡邊千秋)花まつりの歌(同上)仔熊のお角力(山北しげり)(括弧は作者)

林 松 木 先生 著

新刊 詳述
明解 唱歌教授辭典

定價金壹圓千九錢

エホンシヤウカ	ハル・ナツ・アキ・フユ	.35
エホンシヤウカ	第ナツ・アキノマキ	.40
坊田	ナツ・アキノマキ	.35
かすま	ナツ・アキノマキ	.35
スリ	エシヤウカ	.03
エシヤウカ		.08
子供の舞踊	一、二	.60
		.08

東京市神田區 音教書出版協會 振替電話 東京市神田區 三十三番

東京女子高等師範學校附屬幼稚園編 (再版)

觀察の實際

菊判 一三〇頁

定價 金壹圓

送料 東京 金六錢
市内 金九錢
其他 金九錢

○觀察の實際については何か参考したいといふ御希望は皆様から常に伺ふ所、本書はその爲に最も適切親切なる書である。

日本幼稚園協會編

幼稚園談話集 (四版)

東京女子高等師範學校附屬幼稚園編

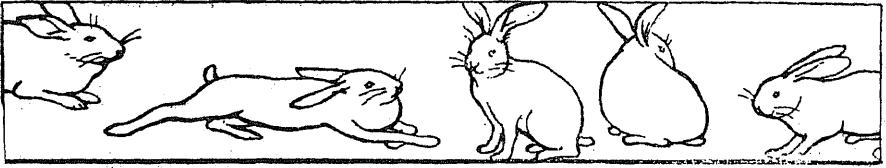
系統的保育案の實際 (四版)

幼児の教育 (月刊)

菊版三五〇頁 定價 金壹圓五拾錢
送料 市内 金六錢
地方 北海道・臺灣 金拾五錢
樺太・朝鮮・滿洲 金拾五錢

定價 金壹圓
送料 金六錢

一ヶ月 金參拾五錢 送料 金一錢
一ヶ年 金四圓貳拾錢 送料 共



第 十 號 幼 兒 教 育 の 幼 兒 第 三 十 九 卷

(次 目)

扉	第七回全國幼稚園關係者仙臺大會……………	倉橋惣三(一)
	保育の特色何故發揮せぬか……………	和田實(四)
秋		
	秋と幼児の健康……………	齋藤文雄(九)
	健康と食物……………	近藤耕藏(三)
	柿と栗……………	堀七藏(七)
	秋の野草……………	藤澤六馬(二〇)
	殘花聚園(九)……………	石川謙(二五)
	鷺と鮎……………	石井庄司(元)
	杜城偶感……………	F . F(三)
	幼稚園と尋常小學校との連絡に關する資料調査(中)……………	東京市保育會(三)
	幼児の追憶……………	曾根保(三)
	この夏……………	倉橋惣三(四)
	ハイデイ——ヨハンナ・スピリ原作……………	津田芳雄譯(五)

法政大學 教授 城戸幡太郎先生著 (最新刊)

菊判二五〇頁 定價一圓八十錢
布装上製函入 送料十六錢

幼兒教育論



興亞日本の建設發展のために、輝ける本書を全保育人に贈る
健全なる國民の育成こそは、幼兒の保育よりスタートせねばならぬ
強く正しく導くために、幼兒教育の新組織を樹立し全問題を解明した最も科學的な幼兒教育論である

— 網 大 次 目 —

- I 就學前教育の重要性 ○我等は何をなすべきか ○幼兒教育の歴史と問題 ○幼兒教育と國民教育 ○幼兒生活と保育人
- II 社會事業と保育事業 ○フレibelとオーウエン ○社會事業と兒童問題 ○貧困兒童の問題 ○農繁期託兒所の問題 ○農村における保育事業の託兒所と母親學校
- III 保母の立場と教養 ○利用厚生教育 ○保母は子供に何を求むべきか ○子供は保母に何を求めてゐるか ○保母の教養 ○保母養成の問題
- IV 幼兒教育の研究法 ○學問研究の態度 ○兒童心理學の發達 ○保育問題の解決法 ○自由遊びについての調査 ○遊具と幼兒の社會性
- V 幼兒生活の指導法 ○幼兒指導の態度 ○幼兒と言葉の訓練 ○子供の問と答 ○子供の嘘について ○子供の生活指導 ○兩親教育の問題

生活技術と教育文化

法政大學教授 城戸幡太郎著

至一八〇 下二一六
四六判 二五三頁

教育は國民に國民としての生活技術を教へる技術である。と喝破して教育の本道を明かにす。

兒童心理學

東京帝大講師 青木誠四郎著

至三五〇 下二四
菊判 四四〇頁

教育實踐上に直ちに活用し得る兒童心理學を明快なる理論と整然たる體系の下に論述す。

兒童生活と學習心理

東京文理大講師 波多野完治著

至二八〇 下二一六
菊判 三九〇頁

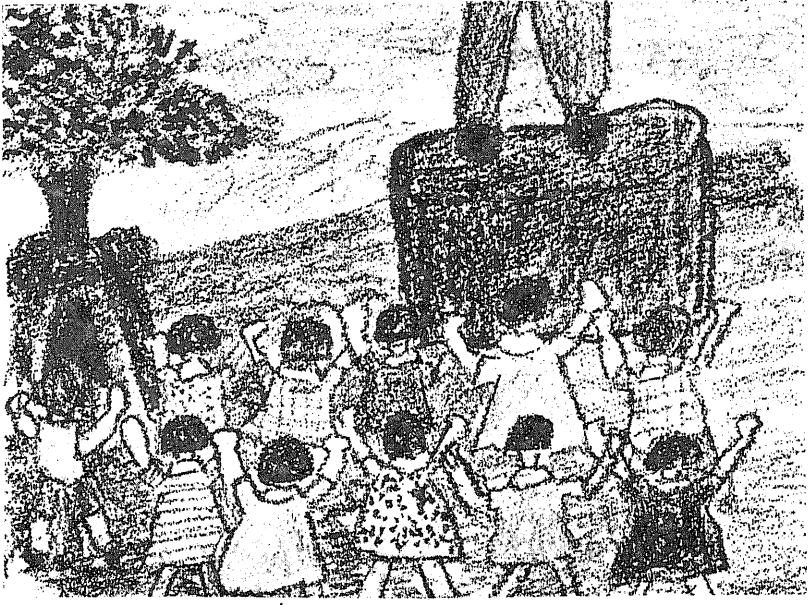
著者の全心理學的知識を總動員して兒童及教育實際上の諸問題に解決を與へたもの。

館文賢

東京電話替
神田區
田段九
ツ一三四五
橋六四八

幼 児 の 教 育

昭 和 十 四 年 十 月



毎朝揃つて一生懸命でラヂオ體操をするのであるが、號令は高いところから来る。小さい子は一番前へ出てゐるから、餘程仰向けにならないと先生の顔が見えない。顔が見えないと號令に力が入らないから、力一ぱい首をのばして上を向く。或る朝ふと氣のついたのは、すぐ目の前にある先生の足である。大きな黒い靴である。それは丁度自分達の頭位のところにある。それから後は、先生の顔よりもその足が、毎朝の親しみになつた。

うしろむきの子ども達と、大膽に膝から上の描いてない足とが、この小さい畫家の心境を、ほゞえましく浮き上らせてゐる。子どものユーモアは眞面目だ。

(倉橋生)

第七回全國幼稚園關係者仙臺大會

——併せて、皇紀二千六百年大會ニ恒常的全國幼稚園機關の設置につき——

倉 橋 惣 三

全國幼稚園關係者大會は、大正四年八月三、四、五の三日間、當時お茶の水にあつた東京女子高等師範學校の講堂に於て創めて開かれた。今の日本幼稚園協會、當時のフレーベル會の主催であつて、時の東京女子高等師範學校長中川健二郎氏のフレーベル會長としての熱意を中心として、時の附屬幼稚園主事安井哲子氏始めフレーベル會幹部主としてその企劃に當り、余もその一人として微力を致した。當時は今日と違ひ、全國幼稚園の名簿さへ整つてゐない状態で、先づその下準備に多くの努力を必要とした。しかも、最初の計畫として、幼稚園關係者諸方面の多大の賛意共鳴を得、殊に時の文部省普通學務局長田所美治氏の賛同を得て、極めて盛會に、内容も亦相當充實することを得た。之れが全國幼稚園關係者の總集合の第一回である。但し、その際にも説が出て、嘗て大阪に開かれたことのあるのを以て第一回とすべく、實は第二回であるといふ考へ方もあつたが、尠くも斯うした名稱に於て、斯うした規模に於て開かれたのは之れを第一回とするが穩當である。

その第一回全國幼稚園關係者大會の決議として、同一の會を爾後四年目毎に、全国各地廻りもちの形に於て開催することに、次回開催地は前回會議に於て協議決定することに申し合はせた。即ち、特に一貫した全國的團結の母體を設くることとは別の問題として、此の會合は申送り式に、開催地が次々に主催者となつて繼續してゆくこととしたのである。

そして、大阪、京都、岡山、名古屋、別府等に於て、それがしつかりに履行せられ、毎回非常の盛會を呈し第一回をして隔世の感あらしめ來つた。此の他に、臨時的に、それ／＼の機會に於て全國的集會が開かれたことも一再ならずあつたが、此の全國幼稚園關係者大會は、全國幼稚園關係者の不文律的規約に於て、一貫せる行事として守られ來つた。而して、その第七回が今月七、八日兩日を期し、仙臺市保育會主催の下に開催せられやうとしてゐるのである。

此の會は、主催地に於て、相當容易ならぬ下準備と斡旋との勞を要する。それは、實際に當つたものでないに察し得られない程である。しかも、平生から、保育の諸種の大きい會合を行ひ來つてゐる關西地方と異つて、從來此種會合の行はれることの少なかつた仙臺として、一層の御苦勞を想はずにはゐられない。われ／＼は開會の日に先だつて、仙臺市保育會長澁谷仙臺市長始め事に當られた諸氏の勞を多し、先づ其點に甚大の感謝を捧げたい。

仙臺大會は、その全國的意義に於て、他の場合と素より何んの變りもない。しかし、極く實際に即して考へられることは、それが東北日本を代表するといふ點に於て、特に意義深いものがあるのである。萬事あからさまに言ふことを許されるならば、我國の保育界の現状は、その普及の度に於て西日本と東北地方とは大に相違がある。素より東北にも個々の幼稚園として、篤志の個人として、その優秀他に譲らざるものゝあることは言ふまでもないが、全般的に、社會的に見て、之れから大に發展に努力を要するにすべき點が多いのである。仙臺大會は、之れに一大刺戟を與へ、一大轉機を與ふるものとして、吾人の期待に極めて大なるものがある。われ／＼が、特に此の會の爲に疾く關心をもち、その成功のために祈つて已まないのもその爲である。又全國幼稚園關係者各位に、此の會への一大協力を勸請して已まぬのも此の爲である。さて、此の大會に於て、何が議せられ、何が研究せらるべきかは、その日の樂しみとすべきであるが、時局に即して、大に緊張せる内容の盛らるべきは、豫想するに難くない。而して、その中には、來昭和十五年の皇紀二千六百年を期しての祝典幼稚園大會が、いづくに於て、如何に舉行開催せらるべきかは、當然打ち合せらるべき緊急事項であらう。それに

就て、帝都東京さいふこも當然考へられることであり、東京側に何んさなく、その心構へもなしさないのであるが、過般の關西保育大會の希望としては、明年の特別の意義に基いて、檀原を中心として開催したいさいふ強い申出が用意されてあり又、既に、その準備も進められてゐるさいふこを聞くのである。之れ亦、實にその意義あるところを對して、何人も疑ひを挾まないであらう。吾人は一つに、仙臺大會全會集の隔意なき相談が、皇紀二千六百年幼稚園大會を、その最も適切なる方法に於て實現するに至らんことを望んでゐる。

次に、同じく皇紀二千六百年の記念事業の一つとして、全國幼稚園關係者の恒常的大同團結機關を確立せんことを案があつて、之れも先般の關西保育大會に於て、吉備保育會長國富友次郎氏の提案となつて現はれてゐる。之れに就ては、それ〴〵具體的研究も攻究されてゐることと思ふし、仙臺大會に、謀られることではないかと思つてゐる。而して、此の趣旨に就ては何人も異議のありやうはないことであつて、吾人も大々の賛意を表するものである。たゞ從來、此の種計畫は一再ならず行はれて、充分現實化せざりし遺憾なる經驗を有してゐる。今回は、充分周到なる方法によつて、是非さもしつかりに實現せられることを切望して已まぬし、又、實現せられなければならぬのである。而して、之れが爲に最も必要なる要件は幼稚園關係者各自が、全國的關心を強持すること、その發展のために、各自の立場を後にして、無私協同の實に就くことである。吾人は此の爲に、從來の既存全國的團體は寧ろ無關係に、先づ純地方的保育團體を基礎として、眞に歸納的方法による、堅實なる細胞的盟約に出發することを、最も賢明なる方式なりと信するのである。

終りに、仙臺大會の成功を重ねて心より祈る。

保育の特色何故發揮せぬか

目白幼稚園 和田 實

四

小學校の子供は兒童と稱し、幼稚園の子供は幼児と稱する。小學校の先生は訓導と稱し、幼稚園の先生は保姆と稱す。而して、訓導の爲る仕事を教育と稱するに對し、保姆のする仕事は保育と呼んで居る。幼児と兒童、保姆と訓導、而して、保育と教育。唯、區別せんが爲めの名稱であるにだけ考へれば、別段、取り立て、いぶかる必要はない。否、は云へ、何もなく唯では濟まされぬ。この様に思へる。否、却つて、其處に、大きな問題が、潜んで居るのではあるまいか、一方は就學前で、教授作用の始まらぬ時代、一方は整然と組織された文化の内容を調へたる教授の行はれる時代、是は何うしてか、相當開きのある、差別の著るしい事柄である。云はねばなりません。何となれば、一方は教育學の指示する所に従つて、教授と云ふ立派な教育活動が行はれるに對し、一方は之を行ふ能はざる程に幼稚なものを、相手さして居るので、其教育の方法は、當然、教授以外の方法に依らざるを得ないからであります。即ち、小學校以上の教育は教授を中心として行はるゝに對し、幼児の

教育は、教授以外の教育方法を採る可く餘儀なくされて居る。と云ふことになつて居ります。是は大きな問題と云はねばなりません。最も、此就學年齢が現在、滿六歳以上になつて居ることには色々議論のあることで、吾々は滿八歳を以て、就學年齢とす可しと希望して居るに對し、保育問題研究會の城戸幡太郎氏などは五歳迄學齡を下げても、宜しからうと云はれて居るので、七歳學齡は一寸不確定なものとなつては居りますが、兎に角、學齡と云ふものを以て、幼児教育と所謂、初等教育とを境界つけることは、差支ないでせう。そして、學齡前の教育を幼児保育と稱するに對し、學齡以後の教育を初等教育と稱して區別し、而して、其區別の主要點が教授作用の行はるゝか否かにありとすることには、誰も、異議のないところだらうと思ひます。即ち、假りに、學齡を滿五歳とすれば其五歳後の教育は、教授と云ふ教育活動が働き掛ける可きものであるが、其五歳以前にありては、當然、教授と云ふ教育活動を控ゆ可き筈のものであると云ふことが出来るでせう。斯様に考へて見る

こ、保育と教育との區別は、明に、教授作用の有無を以て理論的には整然と區別されることであると思ひます。従つて、幼児保育の特色は教育學的に教授のない教育を施すにありと云つて然る可きものでせう、然るに、世間には保育と云ふ仕事も、小學校の教育も、同じ意味のもので、幼稚園の授業も、一種の教授作用と思ひ込んで居る人のあるにはあきれます。そして、幼稚園で手技や唱歌や遊戯を教めることは小學校でそれらを教授するのと同等變りはないではないかと云つて居るのですが、是は單に、教へるに云ふ動作と教育學上の「教授」を混同して居るので、大變な誤りであります。學校の教授と云ふのは、立派な内容のある文化財産の傳授を意味するので、單に教へるに云ふ動作だけ云ふのではないのです。即ち、小學校で教授して居るのは文化財産の傳授であります、幼稚園で、教へるのは、單に遊戯の指示に過ぎないのであります。換言すれば、小學校以上の教育は文化財産の傳授を中心として教育作用が運ばれるのでありますが、幼児の保育は、單に、幼児の生活を充實することに因つて、行はれるに過ぎないのであります。従つて、幼稚園の教育は教授のない教育と云はねばなりません。

生活の充實

既に生活の充實が、幼児教育の主眼點であるとしたら、

先づ幼児の生活は果して、何んなものであるかを知らねばなりません、是は主觀的に云へば生理的生活と遊戯的生活、客觀的に云へば家庭的な生活と交友的生活とに要括す可きものでせう。而して、家庭的な生活、生理的生活は主として父兄の管掌す可きものですから、幼稚園として案配す可きものは遊戯的生活と交友的生活であります。そして、此二つの生活の充實方法としては遊戯材料の指導供給とつけ方の型成とあります。それで、しつけ方も云ふものは子どもの日常生活の間に自然にしつけることを要するものであり、遊戯は其性質上自由を尊重するものでありますから、幼児教育は子どもが、悠々自適、呑氣に遊び暮して居る間に、何時の間にか行はれて行つたこと云ふ所に、本質的進展が運ばれて行く可きであります。斯くしてこそ、幼児教育の特色は具體的に顯現されたこと云ふ可きでせう。然るに、世間には未だに小學校的な時間割表を掲げ、一日を數時間限に區分し、各時間限の間に十五分位の休憩時間を探るに云ふ行方、宛然たる學校の授業と何等異なることなき形式を以て、保育を實行して居る人があります。此の如きことが現在、此東京市内に於てさへ二三に止まらないのであるから、地方にも相當に多く存在するのではないかと思ひます。是は保育の特色を無視する極端なものであります。夫れ程でなくとも、保育事項を以て、學校の教科目と

同様に考へ、教科目の内容を組織する積りで、保育事項の要目を調べ細目を編制して、一種の課程表を作製して居る人があります。是なごも、幼児の生活を主とせず、其遊戯材料を教科材料と同視する嫌あるもので、知らず、識らずの中に、保育の特色を失はせて、遊戯を課程化する恐れあるもの云はねばなりません。

遊戯と課程

課程と云ふものは教科目の内容の組織され系統化されたもので、文化的價値を多分に有し、且相當に權威を有するもので、妄りに、之を變更することの出來ぬものであります。遊戯材料は興味本位のもので、自由なる取捨、變形の許されるものであります。然るに、此區別を無視して、遊戯の課程を作り、課程保育を課するが如きは、折角、自由なる遊戯の本質を束縛して、之を課程化の道程に誘發するもの云はねばなりません。私共は斯う考へます。幼児の生活には「プログラム」はあつても宜しい、獻立表は必要でせう。併し、課程即ち「レッスン」や「カリキュラム」は必要はないと信じます。課程は系統的組織を有する教科内容であります。『プログラム』や獻立表は唯、生活の順序を便宜つけたに過ぎないものであります。此區別を無視して「プログラム」や獻立表の代りに課程表を以てすることは、保育の本質を無視した行り方と云はねばなりません。子

ごもの遊戯生活の進展には組織や系統は必要條件ではありません。

又、或人は豫定出來ることは、之を課程としても差支ないではないかと云ふ人がありますが、之も單に、豫定せられた生活の連續に過ぎないものを採つて、系統的に組織を有する文化財産の一連の系列と同一視するもので、是れは、子ごもの玩具である「きしやん」の若干を採つて以て、一環の珠數と同視する様なもので、僻事と云はねばなりません。要するに、課程と云ふものは文化財の一部分で或系統の下に組織せられた一連の學術であります。遊戯は單に、興味本位に、自由に、選擇せられた一塊の娛樂的活動事項で幼児の依つて以て自己活動の對象とするものであります。此兩者の根本的差異を無視して、遊戯を課程化する必要が何處にありませうか、或は又、遊戯を過程化することに困つて、幼児の生活を早く、課程的學習に導入する効果があるではないかと考へて居る人もありますが、是は性急な教育欲の強い人が、徒に、子ごもの外形的な發達を以て、教育目的を達したかの様に思ひ誤つて居るので、子ごもの内部的充實的の發達を考へない行り方であります。遊戯生活は幼児の特權であります。遊戯に因つて、幼児は眞實な自己活動を遂げることに出來るのであります。此遊戯生活を存分に味はずることに困つて、幼児の個性は、伸々進展する

こゝが出来るのであります。遊戯三昧に、ふけるこゝに因つて注意、統覺想像等の強き活動が練習されるのであります。幼兒は實に、遊戯に因つてのみ、自力的發達を遂げて、自己を識り、自力を恃むこゝの自覺を得るこゝが、出来るのであります。此幼兒の遊戯三昧を取り上げて、之を早く課程化したこゝで、内部的に主觀的に何の利益があるでせう。幼兒は唯、徒に、外部の壓迫に慣らされて、消極的に他力活動を爲すに過ぎないこゝになります。之は決して幼兒の生活力を進展させる所以ではありません。吾人は保育問題研究會の方々が、幼兒教育の的をばつた保育課程の作制なきに腐心せず、寧ろ、幼兒の遊戯其ものゝ研究をモット／＼日本的に進展せしめられんこゝを望むものであります。

法令の改正

遊戯を課程化する誤に陥らしめた責任は何と云つても、法令の不備、誤謬から來て居るこゝを認めねばなりません。現在、幼稚園令には

第十三條 幼稚園ノ……保育項目及其程度、……

ニ關スル規定ハ文部大臣之ヲ定ム

となつて居り、幼稚園令施行規定には

第二條 幼稚園ノ保育項目ハ遊戯、唱歌、觀察、談話、手技等トス

第二十三條 園則中ニ規定ス可キ事項左ノ如シ

一

二 保育課程

右の法令が嚴存する限り、保育事項は幼稚園の教科目であると思はれ、従つて、保育課程を作るこゝが、保育問題研究會の當然の仕事の様に考へられるのだと思ひます。幼兒教育が幼兒の生活充實でなければならず、幼兒生活が遊戯三昧の生活であるとするならば保育問題の研究としては先づ幼兒の遊戯生活の深き研究から始められて然る可きで、保育課程の如きの外れの研究は無駄の事であると思はれます。

幼稚園令施行規定に定められた保育五項目の制定は實に、保育の實狀を無視したもので、幼稚園の保育を學科目中心の學校教育と全然同一視したものと云はねばなりません。従つて、之を視るものが、保育項目を以て、教科目と考へ、課程を作らんとする態度に出るのは當然の成り行きと思はれるのであります。

既に、幼兒教育が幼兒の生活充實主義で行く可き建前にある以上、幼兒の主觀的發達現狀に即して、其環境を整備、按配するこゝこそ保育の任務で、決して、客觀的課程を子どもに附與するこゝが保育の仕事となる可き筈のものでは

ないのであります。且又

遊戯云ふものは課程の如く、其程度を一定す可き性質のものではありません。早い話が、幼児の遊戯として唱ふ唱歌の如き、往々にして兄や姉の學校に於ける教課としての唱歌を模倣、吟唱して楽しんで居ることがあります。遊戯としては是等も決して差支ないことで、茲に、遊戯としての色々の教育的價値があるので、之をしも、幼児の程度に副はぬものとして禁ずるが如きは寧ろ幼児の心理を無視した非教育的措置云ふ可きだと思ひます。

斯う云ふことを考へて見ても、保育課程を作り其程度を限定するこの愚かなことであることが判るでせう。吾人は斯う幼児保育の思想を誤る様な法令を速に改正して、幼児教育の特色を充分に發揮して、我國の幼児教育をして一段の進展を得しめんことを希望するものであります。

然らば、法令は如何に之を改正す可きか云ふに、吾人の見る所に因れば是等の諸條項は凡て削除して然る可きものと思ふのであります。現在、幼稚園の保育は、實に、是等法令の條項に拘泥せずに行はれて居ます。唯、或る部分に於いて、規定の五項目を教科の如く扱つて居るものがありますが、是等の人も、若し法令が、是等の條項を廢止して、客觀的材料を自由にすれば、却つて、其保育方法を改正すべき方向に目覺めるに相違ないと思ひます。吾人は是

等の要らぬ規定を存在せしむることに困つて、生活充實主義の理想を毀損するの愚を遂げたくないと思ふものであります。現今、全體主義の流行は綜合主義、合科教授等種々の形式を以て、教育の諸相を改良せしめつゝありますが、幼児教育の生活充實主義程此全體主義の思想に譬つたりするものはあるまいと思ひます。幼児の生活は個々の保育項目に困つて行はれるものではありません。是等の項目を限定し、其程度を制限するなき、凡そ、全體主義思想に逆行するものだと思ひます。

大正十五年四月、法令の發布せられたまきには、小學校令に居候して居つた身分を離れて、漸く一人前になつたま云ふ悦びを感じて獨立の法令になつたことを祝しました。が、法令の條項を讀んで行くに従つて、吾人は、大に、失望して、ヤレ、折角、獨立の法令になつて、幼稚園教育の特色を發揮するのこゝろに、然りとは幼児教育の前途も遠慮だわい。云ふ感慨を抱いたものでした。爾來十五年幼児心理も一段の進歩を示して居る以上其保育法も躍進す可きではありませんまいか。

希くば幼児教育を理解する方々の力に困つて、速に、此不合理な法令を改正し幼児教育の特色を天下に周知せしむる様致したいものであります。

秋

秋

秋

秋と幼児の健康

恩賜財團愛育會愛育研究所保健部長

齋藤文雄

暑い間は學校の白壁の建物が青葉の

間にひっそり閑さして忘れられた様に

静かでしたが九月の聲を聞くに遠かに

唱歌や誦和の聲が洩れて来る様になり

ました。夏休みの間はお兄さんやお姉

さんと一緒に遊ぶ事が出来ました。が、

學校が始まります。お兄さんもお姉さ

んも朝早くから學校へ行つてしまひま

すので活潑に遊ぶ機會が少なくなつて

参ります。今度はお母さんが遊び相手

に選ばれて自然お家の中ばかり遊ぶ

に云ふ様な事になります。折角夏の間

に鍛へてもこれでは又弱くなり相で

す。こう云ふ時期にはさう云ふ注意を

したらよろしいでせうか。そんな事につ

いて二三の御話を申し上げて御参考
に供したいと考へます。
御承知の通り薄の穂が出揃つて赤蜻
蛉が群れをなして風を切る様になりま
す。本當に吾々は生き効ひを感じるこ
云つてよい位に爽やかさを感じます。
一年の中で最も健康な時期です。稻の
穂は垂れ下つて稔りを急ぎます。薩摩
芋は黒土の中でめきめき肥つて來ま
す。御子さん方も夏の間に鍛へた身體
に秋の仕上げをせねばなりません。そ
うして本當に健康體になつて冬の備へ
をせねばなりません。植物の稔りの時
期はお子さんにさつても健康の稔りの時
期なのです。不幸にして夏の間に病
氣をしたりなされた御子さんはこの時
期に少しでもより多く健康を取り戻し

ておかないとこの冬中愉快にあそぶ事が出来なくなりませう。

丈夫なお子さんが家の中ばかりで遊ぶのは不自然です。お天氣のいゝ日には五分間でも十分間でも多く外で遊ぶ様にしたいものです。夏の間は裸體でも居られますし、又日の光りも強烈ですから紫外線が多く、知らず知らずの中に皮膚を焼く事が出来ませう。併しこれからは日の光りが弱くなる一方です。殊に冬になりますとこゝでも弱くなり紫外線がますます少なくなりませう。夏に焼いた皮膚をこの機會に最一度焼いて仕上げをしますのです。手や足は出来るだけ日に曝す事です。日光浴を申しまして秋は夏と違ひますから嚴格に慎るゝやる必要はないのです。足を何分間日に當てるさか、手を何分間日に當てるさか、そんな六か敷い事はやめませう。何分間等申ししても都會々田舎、空氣の湿度や清淨さ等の違ひがありますから、これは土地によつ

てきめなければなりません。それに夏の間に黒くなつた様なお子さんにこんな事をしても、こゝでもぢつとして居りませぬ。寧ろ鏝の廣くない帽子をかぶせて充分に日向で遊ばせてやればそれでよい事なのです。日光に慣れて居ますし、又日光は弱くなつて來て居ますから充分に日向で遊ばせても日射病等にかゝる心配はありません。

外で遊ぶと云ふ事は日の光りだけが頼りになる云ふのでは無いのです。最一つ忘れてならないのは空氣の動き、つまり風の事です。日に當る爲めに外に出る。外に出れば自然風にも吹かれる事になる譯ですが、この風に當ると云ふ事が又大切な事なのです。普段餘り裸體にならない人が裸體になつたりしますと直ぐ風邪をひきます。これは風に對する皮膚の抵抗が出來て居ないからです。これではいけません。風も温度、湿度、速度の違ひで色々ですが秋の風は概して乾燥して居ますか

ら吾々の皮膚の水分を拭きこつてくれませう。随つて熱が奪はれ吾々は爽快な氣分になります。これはお子さんでも同じです。この爽快な氣分になつた時に身體の方では新陳代謝が旺んになつて來るのです。血のめぐりがよくなる、食慾がつく、肉が締つて肥つて來ると云ふ譯です。

同じ日光浴や空氣浴をやるにしても都會よりは田舎の方がいゝ譯になります。空氣が綺麗で埃りが無いために日光の中の紫外線も多いし、風があつても埃りを吸ひこむ事もありませぬ。同じ時間、外に居ても都會々田舎では大變な違ひです。然し皆ながお休みではありませぬから毎日田舎へ行つて來る譯には參りませぬ。随つて日曜や祭日のハイキング又はピクニックの様な事が大變意味を持つて來る事になります。これは是非やる様にしたいたいです。

そう云ふ場合の御注意を二三申し上

げて見ますのも無駄ではありますまい。

朝はなるべくお早く出掛けなさい。

水筒は忘れない様に。御子さんに喰べものを持たせてはいけません。よく途中の電車の中で飴を始終しやぶつて居る様な御子さんがありますがあれはよくありません。やつぱりお家に居る時と同じ様に喰べものはきちんき時間と與へる様にしたいものです。運動して居る間は出来るだけ輕裝。夕方は必ず早く歸つて御飯の前に入浴させる。尙ほ躰けの點から申しまして草や木を可愛がる事や、お辨當のあごの紙屑は各々が片づける事や、疲れても直ぐに背負はれる様な事は控へて、或程度辛棒させるご云ふ様な癖を教へこませる事は是非必要です。何も西洋人を例に出す必要はありませんが、段々ご教へこんで現在何處でも見られる様な日本人の無秩序、無統制、無遠慮は將來なくなる様に躰けて行き度いもので

す。

次に着物の事で是非申し上げて置きたい事があります。勿論吾々が着物を着ますのは保温の爲めではありますが人間の皮膚は少し厚着しても薄着しても、うまく調節して呉れて居ります。

厚着をしますご体温が著りすぎて汗をかく、汗をかゝないまでも水分の發散が充分にゆかなくなり皮膚が所謂ふやけた様になり抵抗力がなくなります。

ですから御子さんも出来るだけ薄着の習慣をつける事が是非必要です。眞冬でも靴下もはかずに半ズボンで居るお子さんを見て羨ましいと思つたら御自分で唯今から癖をつけてゆく事です。朝の間寒かつたから一枚餘計着せる、そしてその儘日中になつても、脱がせないで着せておく、ではいけません、出来るだけ薄着に、殊に運動して居る時には輕裝に。御家庭によつては毛のピタリしたシャツ等を着せて居る向もありますが極寒の所ならいざ知

らず、普通は餘り感心いたしません。

毛のものはなるべく羽織の様なものだけにして置き度いものです。手も足もピタリと暖く包んでしまふのは餘りよい事ではありません。多少換氣が出る様に工夫したものが理想的であります。それから夜寝る時は必ず寢衣に着換へさせる。それは當り前ですが寢衣の下にシャツをその儘着て居る様なお子さんがありますがこれでは駄目です。必ずすすつかり脱いでしまつて寢衣を着せる事です。そうして一日に一度は必ず裸かにして皮膚を空氣に曝してやります。これがほんの三十秒でも大變樂りです。朝起きたら又寢衣を脱いで普通の着物を着る。これに乾布マッサージュでも加へれば尙更結構です。この習慣を冬迄續けてゆきますご風邪のひき方がすつと少なくて濟む事請合ひです。

扱て最後に秋ご食物に就いて些か申上げる事にいたします。秋になります

こ「馬肥ゆる」ばかりではありません。御子さんも肥つて参ります。食欲がごん／＼旺んになつて参りますから餘り無制限に澤山喰べてお腹を毀さない様に氣をつける事が肝要です。又一方喰べ物が偏して困る様な御子さん、つまり偏食のある方の矯正をするのには、秋の様な食欲増進する時を逸さずに利用する事です。お腹が空いてる時に先づ嫌ひなものから喰べさせてあげて好きなものを喰べさせます。そうして段々少しづつ嫌ひなものゝ量を増して行きます。最一つこの時期に考へておく事はビタミン類です。御承知の通り人間は夏の間色々なビタミンを澤山攝取します。過剰なビタミンのあるものは身體の中に貯へておきます。そうしてビタミンを攝る機會の少い時期乃至はビタミンを澤山に必要とする時期の爲めに用意します。例へばビタミンのAやCは冬は澤山身體が要求します。そう云ふ時に豫て貯へてあつたビタミ

ンを使ふのです。ですからビタミン類の補給は充分にしておく云ふ事も大切な事です。風邪をひかぬ様にする爲めにはビタミンAが必要であるを申されて居ます。特に澤山與へる必要もない事でせうが秋の終り頃からぼつ／＼こう云ふものを與へるのもよい事でせうと存じます。

兎に角日本の子供の三大死亡原因の中に夏の消化不良、冬の肺炎がありま

健康と食物

す。その怖ろしい肺炎の時期がこれか

らそろ／＼近づいて参ります。これにて身體の抵抗が出来て居れば風邪をひいても肺炎には罹らずに済みます。その身體の抵抗を養ふ事はさりも直さず唯今迄申し上げた様な事を實行する事なのです。それには秋の初めから實行しませんさもう間に合ひません。そう云ふ意味で唯今は一番大切な時期です事が出来ませう。さうぞ僅かの注意ですからよく護つて御子さんの大難を防止します様に願ひます。

東京女子高等師範學校講師

近藤耕藏

人間の健康及び成長に影響する主な要素は食物・空氣・日光・運動・休息の五つであるとせられては居るが、その中でも食物が一番に關係が深い。何にせ、一日に三回以上も腹の眞中を通り、血も肉も骨もそれから出来やう云ふ

のであつて見ればその筈であらう。併し、食物が不完全であつても、それが一時的である間は、大した事は無い。それはかゝる場合の爲に平素から用意がしてあるさでも申しませうか、平素體内に蓄へておかれた養分の融通

に依つて、一日や一週間位の事では目に立つ程の事も無いのが普通である。この點では自然の保護は誠に厚いと思つてよい。

併し其の様子、急には目に立つ程の結果が起らぬ云ふ事自身の中に、之を濫用すれば恐るべき危険が伏在するのであつて、之れが爲に人間は知らぬ間に大なる危険に近づき、それゝ氣がついた時には既に容易ならぬ事態に直面して居る云ふ場合が、實に甚だ多いのである。

でありますから、我々は嗜好や本能で永い間食物を攝つて居るに、決して安心はならぬものでもあります。特に幼少年者に於ては、大人よりも食物の不完全に敏感でありますから、一層深い注意が必要であります。一例を擧げて見ますに母親が白米が好きで、自然ビタミンB₁に不足勝の食物を攝つて居るに、母親自身には大して自覺症も無く、足が少し重い位の容態……専門家

に云はせるに潜在性脚氣……であるに、其乳で養はれる幼児は早くも立派な小兒脚氣に罹る云ふ事が珍しくないであります。

榮養學云ふ學問は、僅か六十年程以前に漸く其の芽を生やした學問ではありますが、何にせよ人間に最も直接的な問題を扱ふが爲めに一般の關心も自然深かつたせいもありませうが、實に目醒しい發達を遂げて今日に至つて居ります。それで今日では、如何なる方針で毎日の食物を食べれば、吾々の健康は保たれ得るか云ふことが、大體完全に突止められた云つてよいばかりでなく、今日の榮養學の指すところに忠實に従つて行くならば、健康の上にも健康、即ち今迄經驗しなかつた一段高い水平線上の健康、云はゞはち切れそうな健康の持主となり、よしんば百年以上の長壽は得られなくとも四十や五十で病死するやうな危険は殆んど無く、今までの人々が隱居する頃の

年齢になつても、尚ほ壯者を凌ぐ程の元氣と活動力を保ち得るものである云ふことが、殆んど確實に期待し得られるやうになつたのであります。

かく申しますに、今まで新聞や雜誌や人の話しで○○式健康法又は○○式長壽法などの聲には聞き慣れもし、だまされ慣れもした人々であるから、それゝ、是れゝの玉石の區別が立たず、あゝそうかゝ軽く聞き流さうとする人が多いかも知れませんが、全世界の科學者の幾十年かに亙りての苦心慘愴の科學的研究の結果云ふものは、決してそんなものはありませんから、よくよくそこには注意を願ひたいのであります。

それでは今日の榮養學が指す營養的食事の方針は何かと、一足飛びに其の結論を聞いて見ますに、大要次の如くであります。

(一) 食物の分量をきれ程にしやうかについては深く心配しないでよい。

天然自然の食欲と腹のへり加減を参考して、それに具原益軒式の腹八分主義を加味して行けばそれで安全である。カロリーの計算は皆ての栄養學では大切そうに扱つて居たが、今では特別の場合の外手数はかりで實效は無いと判りました。吾々が深く留意せねばならぬのは食物の量にあらすして其の質にあるのだ。

但しこ、で一つの本誌讀者の特別の御注意をひきたいと思ひます事は母親が幼児の食べ過ぎを恐れる結果、幼児の食欲が満足する迄に食べさせないこと云ふ事が、特にインテリ婦人の間に多くある事でありませぬ。竹内茂代博士の言に依るに、同博士の許にインテリ婦人が連れ来る虚弱兒童の大部分は食物の不足、即ち母親達の全然根據なき見込みから来る食量の制限が基となつての栄養不良兒であること云ふ事である。ですから、苟も小兒の食物に量的制限を附せんとする母親に對しては、さ

うしても、カロリーの計算は必要ではありません。計算して其の年齢に對する所謂標準量に近い量だけは是非共與へなくてならぬのであります。盲目式の食量制限に、可愛相にして且つ不利な方針は一寸見當りません位です。

(2)蛋白質は是非必要な營養素ではあるがさりとて澤山食べる必要はない、動物性の食品を毎日少しづつ食べ、よ位の注意で十分である。

(3)無機成分の内カルシウムはやゝもすれば不足になるから、それに對しては、深い注意を要する。

(4)ビタミン類、殊にA、B₁、B₂、Cは、やゝもすれば不足するから、之れまた十分の注意を要する、以上であります。讀者のうちには、『カルシウムやビタミンの事は十年前に既に耳にしたことろだ。その當時はカルシウム煎餅もあり、カルシウム甘酒もあつたが、昨今では寧ろその聲が餘り聽えなくなつたではないか』と申さるゝ方があるかも

知れませぬ。新聞や雑誌の題目としては、如何にもその通りであります。が、學界の方では、爾來研究の進むにつれていよいよますますこれ等の營養素の大切な事が判つて來まして、從來カルシウムなら毎日少しづつ、ビタミン何々なら毎日少しづつ申して居つたその分量では、まだ健康満點を得るには不十分であるとの判り。從來之で十分だと思はれた分量の三倍四倍位の量を攝るに、所謂多々益々辨ずる式で人の健康は益々高まつて行くに申す様になつたのであります。

そうなつて來ますに、如何なる食品がこれ等大切な成分に富んで居るか、と云ふことが、次の大切な問題になつて來ます、即ち各個の食品についての知識が必要と云ふ事になつて參ります。それで、此の文の最後に、それについて多少の參考になりそうな表を附けておきましたから、ゆつくり御覽を願ふことにして、もつと話を手取早く

何れの家庭にも向くやうに、上記の方針を言ひ直して見るに、大要次の如く なります。

一、主食物の米は白米では断然いけません。白米を主食として居ながら、ビタミン B_1 に缺乏しないのみならず、

従来必要とせられて居つた分量の三(四)倍も攝らうとする事は、他の副食物に十分氣をつければ、全然不可能ではないにしても、非常なる難事でありまして、數週間も之をすれば大抵の主婦は神經衰弱になる位に氣を使はねばなりません、七分搗米も胚芽米も結構ですが、七分搗胚芽米でも呼ぶべき精白度の淺い胚芽米が一番良いのです、又麥、粟、稗、そば等の混食も甚だ結構です。

一體ビタミン B_1 は澱粉や砂糖類を多く食する程その多量が必要であるのであります、そこで、米、麥、小麥等、澱粉質を主成分とせる穀物の粒には天然がチャンミ B_1 を附けて呉れて居るの

でありますのに、人間の淺い知恵、若しくは愚なる好みから、わざ／＼手をかけて之を除去して進んで不健康を招いて居る事は、何たるひが事とせうか。世間には、「おかすが貧弱だからせめて米だけでも白く」云ふ人があるが、誠に氣の毒なものです。

(2) 植物性の副食物はゆで過ぎたり洗ひ過ぎたりしないやうにして成るべく澤山に食べるがよい、植物性食品のお料理が面倒でいやなら、「味噌汁の身を多く」云ふ方針にしてもよろしいのです。

一體植物性の食品と云ふものは穀類や薯の類なき二三の例外を除きます、大體、カロリーには乏しく、言ひ換へますと腹持ちは悪いが、その代りビタミン類やカルシウムには比較的豊富に居りますから、左様の事が言はれるのであります。

(3) 植物性食品の中でも葉のやうな青い部分は特別養的に貴いもので

す。ですからほうれんそうばかりでなく、大根の葉でもかぶの葉でも極めて栄養的な食品であります。従つて葱の白根は其青いところより、キャベツの白いところは其青いところより、栄養的には劣ります。

右は青い葉がビタミンAビタミン B_2 ビタミンCの良い給源であることが主なる理由となつて居ります。カルシウムに富むことも保助的の理由にはなりません。

(4) 次に野菜を生で食する事は極めて大切な一個條です。ですから、生で食するのが寄生蟲や傳染病の關係から好ましくないと思ふ人は、極ざつと煮て食するとか、熱湯をかけた丈で食するとか又はカルキで消毒して食するとかするがよろしいのです。漬物は極めて短時間に漬上げたものでないに効力がありません。

家の經濟が若し許しますならば生野菜の代りに、果物でも結構です。殊に

蜜柑類は優れて居ります。

右はつまりビタミンCを得るのが目的であるのですが近頃は、急を要する場合には醫師の手でビタミンCの注射も行はれて居ります。

以上は植物性食品についての話しであります。

次は動物性食品の話しに移ります。
(5)動物性の食品を少しでよいから毎日食べるがよい。

之は蛋白質が健康に必要であること
から来たことでありますが、特に動物性と言つたわけは、動物性の蛋白質が植物性の蛋白質よりも勝れて居るばかりでなく、植物性の蛋白質の缺點を補つて其の効果を高める役目をもするからであります。

但し蛋白質は所謂食ひ溜めが永くは出来ませんから、成るべくたび／＼食するやうにしたい。動物性の食品なら何んでもよいから多量でなくてよいが一日に一度位は言ひたいところで

す。日本の現状では都會の人や富んだ家庭では動物性蛋白質を攝りすぎて居り、田舎の農山村の人は著しくそれに不足して居るを申してよい。

(6)動物性食品の中でも骨ぐるみ食い得られる小魚は特に重要視するを要します。

そのわけは第一は前に述べた良質の蛋白質の供給になり、第二は其の肝臓腎臓、心臓等の臓腑がビタミンA、B₁、B₂、C即ちオールビタミンの極めて豊富な供給源であり、第三は其の骨が又、カルシウムの比類なき給源(心なしに用ふるに多すぎる虞れがある位)になるからであります。

以上(1)から(6)までの六ヶ條で現代栄養學の指す方針の通俗的紹介がすみました。

病氣にかゝりたく無い人、健康以上の健康體になりたい人、四五十の坂を越えたばかりで死にたくない人、自分は既に六十の坂を越えたが、後繼者

はまだ幼稚園だと言ふやうな人は、忠實に以上の六ヶ條の實踐を是非御勧め致します。殊に之から小學校だなき言ふ少年の健康と成長とを平均以上に望みたいと思ふ方々には、上記の六ヶ條を大人よりも一層強調して、高度に實行せられるやうに御勧め致します。

餘談として更に一二を附記致します。牛乳と鶏卵とは、さすがに天然が幼動物の食料に準備して置いた食物だけに、一品で、よく栄養上の諸要求に應じ得る特色をもつて居ります。ですから之を日常の食事に混用するに、非常に食事の安全度を高めます。

之を一國の問題として見ますと、島國なる日本は結局牛乳には恵まれない運命に在りますので、國民保健上聊か憂鬱を感ずるのでありますが、幸に海産物に富み、骨ぐるみ食し得る小魚は、特に平民的な安價の食品となつて居りますから、國民が此の點に醒めさへすれば、汰して、民族的の心配にはなり

ません。吾々の如き懐中のさみしいものには特にうれしい福音であります。

最後に、ビタミン類ごカルシウムに富んだ食品表を附記致します。

○ビタミンAに富む食品

鰵魚の臟腑殊に肝臟、卵類の黃身、肝油、バター、夏の牛乳、鰻、まぐろ等。

穀類の胚芽、ほうれん草、青キャベツ、青豌豆、一般青い葉、人参、トマト、南瓜、黄色の甘藷、櫻桃、あんず、乾海苔等

○ビタミンB₁に富む食品

鶏卵、酵母、動物の臟腑、牛豚馬肉等
穀類の胚芽ご糠、小豆、大豆、乾海苔、人参、キャベツ、落花生、粟等

○ビタミンB₂に富む食品

動物の臟腑、鶏卵、牛乳、豚肉、羊肉、酵母等

青い葉、キャベツ、乾海苔、豌豆等

○ビタミンCに富む食品

動物の臟腑
大根及び其の葉 かぶ及び其の葉、

青い葉一般、青豌豆、青アスパラガス、たうがらし、トマト、白菜、花やし

い、豆もやし、麥もやし、蜜柑類、桃、胡瓜、馬鈴薯、林檎、苺、バナ

等

○ビタミンDに富む食品

椎茸(乾)、卵黃、いわし、かき、干にしん、魚の肝臟、山羊乳、肝油、バター

(日光に浴すれば人間の体内でD

柿 と 栗

東京女子高等師範學校附屬小學校主事

堀 七 藏

が出来ますから戶外生活を好む人にはDの心配がありません

○カルシウムに富む食品

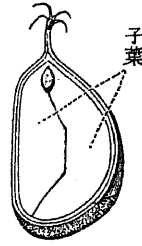
たゞみいわし、ごせう、白す干、あさり、たにし、さくらえび、牛乳、

鶏卵、糖密等

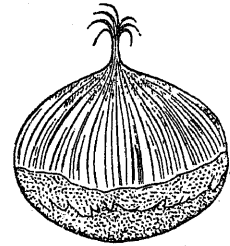
ひじき、あらめ、白ごま、昆布、蔕、百合根、椎茸、大豆、小松菜其の一般の葉等

一 柿ご栗ごは秋の果物の二大王で、子供にも大人にも大變すかれるもの、日本人で柿のきらひなものがないご同様、栗を好まぬものもない。しかし柿ご栗ごは果實ごして大變な相異があ

る。柿は食べてもその種子をまいて置けば芽を出して柿の木ごなり、八九年もするご花が咲いて實ごなる。しかし栗は食べるごまくべき種子がないから栗の苗木を仕立てるには栗の果實を食はないで、土中に埋めて置かねばなら



(果實の縦断面)



(實果)

る。これが柿の心臓いはれるもので、その周圍に八つの室がある。これ等の室には一つの大きな種子がある。

ぬ。

二

誰でも知つてゐるやうに、柿の果實はその面が滑かで、熟するに赤くなる。果實の本にあるへたは花の萼が成長したものである。柿の果實を横に切つて

見るに、薄き皮の内部は水分多くして軟く、甘柿ではごまがある。このごまはまだ熟しないときにあつた澁が變化して出來たものである。それでごまが多いほぎ、澁味が残つてゐないので甘味が多い。ごまはきざはし柿さもいはれる甘柿にだけあるもので、たるがきのやうなさはし柿にはない。

柿の果實の中心には粗き部分があ

尤も種子がなく甚だ狭い隙間になつてゐるものもある。それで、柿の果實には八箇以下の種子があるが、吾々がたべるには種子のない方がよい。

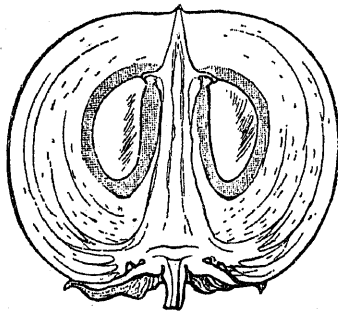
若し柿の果實を縦に切つて見るに、その中央にはへた(萼)及び柄より果實の先に向へる心がある。この心に沿つて縦に長い橢圓形をなした種子の入つてゐる室がある。その中の種子は果實の先に近い所に著いてゐる。注意して見るに、種子のない室にも一つの甚だ小さい赤茶色のものゝ著いてゐるこゝがある。これは種子が成長しなかつたものである。さて柿の果實をたべるこゝきにはそれを食べる前に注意して幼児

に觀察させるがよい。しかし六ヶしい理窟を説明することはよくない。柿の果實がみんなになつてゐるか注意して觀るだけでも結構である。

三

蟹が猿から貰つた柿の種子は蟹の丹精によつて芽を出し、見るに成長し

(果實の縦断面)



て大きな柿の木になるから、幼児は柿の種子を暫く土の中に埋めて置く、直ぐにも柿の果實がなるやうに思ふ。

それでその柿の種子のきこから芽が出るか、柿の種子の内部がどんなになつてゐるかなぎは幼児にも不思議の種子であらう。

柿の種子は柿の種類によつて多少その形も異なるものであるが、大體は楕



(胚)



(種子)

(割りたる種子)



圓形で、扁たく、その一端には果實に著いてゐるた痕がある。

この柿の種子を縦に割ることは幼児に出来ないが大人には容易に出来る。

横に切ることは中々困難であるが、縦に割ることは比較的容易であるから、縦に割つて種子の中がどんなになつて

ゐるか、觀察したり幼児にも觀察させるよよい。赤茶色の薄い皮が所謂種皮である。その中に淡鼠色の堅き物があつて、その中に一つの小さき白色の軟いものがある。この白色の物は二枚の薄く扁たき子葉と一本の柄の如きものから出来てゐる。そして柄の如きものの先が種子の果實に著きし痕に向いてゐる。それで柿のへたを下にして果實を上にして置く、種子の中の子葉が下に向ひて倒になつてゐるわけである。

この種子から芽を出し柿の木を生ずるきには、子葉が最初の二枚の葉となり、柄の如きものは根となり幹となる。そして淡鼠色の物は養分として用ひられるのである。さてこの子葉と柄の如きものを併せて胚と稱し、淡鼠色のものを胚乳と稱するのである。

かく柿の果實は所謂果物として悉くたべても、その種子をまけば芽が出て柿の木となる。故に幼児に柿の果實を

たべさせたならば、その種子を瓦鉢に土を入れてまかせて置くよよい。時々水を與へて置けば種子か芽を出し二葉が最初に出て来るところを観せることが出来るよう。

四

栗を食べるきなくなり、芽を出す種子がなくなる。一體栗は果實かそれとも種子か。また果實でもあり種子でもあるのか、はつきりせぬかも知れない。實に栗は果物でありまた種子でもあるので、柿の果實と種子とがはつきり區別が出来るときは大に趣が違つてゐる。若し栗のいがが果實で、栗は種子だと思ふものがあるき、それは大きな間違である。

栗のいがは、栗の雌花を包める苞が大きくなり、その外面に多くの針を生じたものである。いがの中に三つばかりの果實を包み、いがはそれを保護する役目をしてゐる。秋になつて果實が熟するき、いがは先の方から裂けるの

で果實が落下するのである。

栗の果實には茶色の滑なる堅き皮がある。そして果實の先が少しく尖り、その所に雌蕊の先の尙ほ残つてゐるこゝがある。また果實のもこには淡茶色の粗い面がある。これがいがに著いてゐた痕である。栗の果實の形が一樣でないのはいがの中で互に押合つて成長したからである。三つ栗では外栗ま中栗ま形が異なり、二つ栗ま一つ栗までも、果實の形が異なる。二つ栗では中栗に相當するものが多く杓子になつて居り、一つ栗では外栗に相當するものが杓子になつてゐるこゝが多い。栗のいがには三つ果實のあるのが普通である。しかし種類により八箇の果實の存するものがある。

栗の果實で、外側の堅き皮(普通いふ栗の皮)をむくまその中に淡茶色の軟なる澁皮に包まれた種子がある。所謂澁皮が種子の皮である。種子は一つの果實の中に一つあるのが普通である。

しかし二つあるふたごくり、三つの種子があるみつごくりもある。まの種子も各澁皮で全く包まれてゐる。この澁皮を除き去るま、中に白く厚くして養分を多く含める部分がある。これが吾人の食用まする部分で、この部分が子葉ま稱する二枚の厚くして互に密著せるものである。そして果實の先に近い所にて一つの小さき棒の如きものを挟み、これに連なつてゐる。それで栗の種子は豆によく似てゐるが、柿の種子まは大いに異なるのである。このこまは幼児には容易に理解し得るまころ

秋の野草

東京女子高等師範學校教諭

藤澤六馬

でない。説明しない方がよい。それよりも柿の種子をまくやうに、生栗を瓦鉢の土の中にいけておくがよい。するまその中の種子より一本づつ若き栗の木を生ずるものである。このまき種子の中の棒の如きものは子葉より養分をまりて伸出で、根及び幹まなるまこまが分る。

幸に柿の種子も芽を出し栗からも芽が出たならば、それら鉢植まして成長させてもよくまた庭に移して成長させて記念樹まするがよいでせう。

春の野、夏の森に水邊、秋の野、冬の林や海なごそれぞれの季節に優れた情景がある。同じ野でも春の野ま秋の

野まは趣は違ひ、これに對する感情も著しく異なるものである。これは色々の事情にもよるが何よりも草木が季節に

よつて變り、種類も新に、獨特の植物景觀に因るまゝころが大きいと思ふ。秋の景色は何まなく寂しいさいふのが恐らく萬人の感情であらう。若葉の萌える新緑の間に咲き亂れる春の野草ま、

枯れ草のまにまに咲きおくれた花の哀れな姿、秋風に戦ぐ優しい秋の野草まは見る心持の上に變りのあるのは當然である。この野草も山紅葉も科學的に考へれば季節に適應した植物の生育現象であるま云へるが、それにしても、その姿や色彩なまが外界によく調和した天然の美には驚かざるを得ない。

秋ま云へば清澄の空、野草、紅葉、月なまが聯想される。秋の千草の中にも野趣豊かなものが多い。今この秋を盛りに咲き誇る野草に就いて少し述べて見やう。

先づ秋を象徴する植物は言ひ古るされた傳統の景物ではあるが何をおいても秋の七草である。

萩が花、尾花、葛花、なでしこの花、

女郎花、藤袴、朝顔の花ま歌にあるやうに、この七種を云ひ、時代により多少種類を異にする、古くから詩人、歌人によつて色々に詠はれ、繪畫なまに美の對象まされてゐる。

秋の野に咲きたる花をおよび折り搔き數ふれば七草の花(萬葉集——山上憶良)

芽の花乎花葛花瞿麥の花姫部志又藤袴朝顔の花(山上憶良)

ハギ 胡枝・芽・萩(マメ科)

一名ヤマハギま稱し、山野に自生する多年生の植物である。秋日弱々しい莖の先に小さな紅紫色又は白色の蝶形花が總狀について、莖ま共にそよ風になびくその姿はいかにも可憐である。又葉に露びたる風情も亦佳い。普通のハギの他にマルバハギ・マキエハギなまがある。

チバナ 尾花(イネ科)

現今ではスキマと呼ばれ、廣い秋の野山の到るまゝころに生ひ茂つてゐる。

その風に戦ぐ風情は快晴の秋の空に照らして見るま實に美しいもので、又月を配した情景も深い趣がある。このほかこれに近いものにはアブラスキ、ナギなまがある。ナギまは顯の世の有無で區別が出来る。即ちナギには世がない。

クズ 葛花(マメ科)

クズは蔓性の植物で野に匍ひひろがり、又他の樹木に纏み、秋の候紅紫色の蝶形花を總狀に著ける。殊にその大きな葉が秋風のまにまに飜り、その白い裏をかへすまゝころに趣があつてこれを詠んだ歌がよく見られる。莖は古くは葛衣ま稱するもの、原料まして、その纖維が用ひられ、根は發汗劑、清涼劑等の藥用に供せられ葛根まいはれてゐる。又これから採つた澱粉を葛粉まいふ。

ナデシコ 瞿麥・撫子(ナデシコ科)

一名カハラナデシコま云ふ。花の盛りは夏であるが常夏ま呼ばれるやう

に花期が長く秋にも澤山見られる。河原や山野に自生し、淡紅色の可愛らしい花が咲き、雑草の中の一輪は自然の寵兒の感がある。花瓣の先が深裂して糸のやうになるところがセキチクミ違ふ。古來人の心を惹き大和撫子を以て日本女性の象徴として賞へられてゐる。

ナミナヘシ 敗醬、女郎花(ナミナヘシ科)

陽當りのよい野原によく育ち、秋の候、莖をぬき、梢上に著く黄色の優しいしなやかな花のさまは深い趣がある。この屬の植物にはナトコヘシといふのがあるが、これはナミナヘシより莖葉に短毛が密生するところ、稍太いところ、又花の色が白いところなどで識別される。

フヂバカマ 藤袴・蘭草(キク科)
これも野原に、河原に極く普通に見られる。葉は通常三裂し、莖葉に佳香を發する。花は淡紅色の愛らしい小花

で集つて繖房状につく。これに似たものでまぎらはしいのはヒヨドリバナといふのがあるが、これは芳香も少く、葉は三裂せず、莖や葉に毛があるこ



ろ、花が多くは白いところなどで區別することができる。

アサガホ(キキヤウ科)

これは現今栽培されてゐるアサガホ(牽牛花・朝顔)とは違ふやうで、今のキヤウ(桔梗)が古來山野に自生してこれをかやうに呼んでゐたやうである。この碧紫の美花は誰も知るころである。

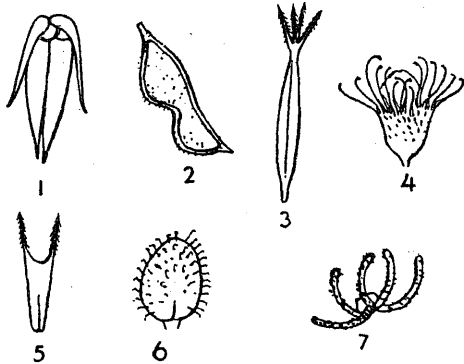
この他に秋の七草の一としてカルカヤを入れてゐるものもある。これは今のメガルガヤをさし、雅趣に富むイネ科の植物である。之れに似たものでヲガル

メガルカヤ カヤミいふのもあるが、共に秋の野草として昔から詩歌に詠まれてゐる。何れも今日の秋の園藝植物に比べて著しく異つて、が必しも美しくはなくとも幽雅・清楚といふやうな感じのするものばかりである。

この他秋の野草にきんな種類のものがあるか。先づキク科の植物ミイネ科の植物ミがあげられるであらう。普通のを舉げて見ても、アキ

ノキリンサウ・アキノノゲシ・ヤクシサウ・アキノハハコグサなどの黄色の花の咲くものをはじめ、路傍にはヨメナ・ノコンギク・ユウガギクなど非常に多い。又アザミの紅紫の花も秋の野の美しい。又アザミ・ヤマアザミ・ヒメアザミ・美観である。ヤマアザミ・キクアザミ・ミヤコアザミなど山野に、マアザミは原野に濕地に、その種類は仲々多い。次にススキやカルカヤをはじめ、チカラシバ・カゼクサ・チギ・ヨシ・アブラスキキ・ササガヤなどイネ科の植物が秋風にその葉や穂を戦がせてゐるのは野趣豊たかで秋の氣持を漂はすものである。その他マメ科のハギの類がツルマメ・ノアヅキ・ヤブマメ・クズ等他の樹木にからみついでゐるものがある。

ミナギその種類は多い。その他リンドウ・アキチヤウジ・ツルフヂ・バカマ・ヤマトリカブトなどの碧紫色の花の咲くもの、マツムシサウの水色の花、ワレモコウの濃い紅色なご一際目立つて、秋の野に忘れられないものとして算へるこゝが出来る。



はれるが、かやうなこゝがうなづかれ
るこゝろもないではない。今普通に見
られる黄色の花の咲くものをあげて見
るに次のやうなものがある。

キンミヅヒキ・ノアヅキ・
カラスノゴマ・チヤウジタ
デ・ミシマサイコ・アキギ
リ・チミナヘシ、其の他前述
のキク科の植物やヤブタバ
コ・ガンクビサウ・メナモミ
等で、キク科の植物が特に
多いこゝが原因して概して
秋の野草には黄色のものが
多いといふやうに思はれる
のであらう。然し黄色の他
ウメバチサウ・ヤマハシロ
ギク・シロヤマギクなどの
白色、淡紅のキツネノマゴ
など限りない變化が見られ、何れも不
自然でなく、秋の野に調和してゐる。
野草の間のツルリンドウ・ハダカホ
ホヅキ・ヒョドリヨウゴなどの真紅

衣類に著く果實の色々
1. キノコヅチ。 2. ヌスビトハギ。
3. センダングサ。 4. キンミヅヒキ
5. タウコギ。 6. オナモミ。 7. メナモミ

の實も亦樹木の紅葉と共に秋の美觀を一層添へるものである。

秋の野を散策するによく袴やその他の衣類に附著して來るものが仲々多い。この中には様々の種類の種子があつて、これは種子の散布の目的ではあるが、何處に捨てられることもあこでなく一生を托して著いて來るのである。それを思ふに哀れな氣持になつて調べて見るに實に巧妙な仕掛になつてゐるこゝがある。

路傍のキンミヅヒキ(バラ科)の果實に多數の刺毛を具へ、野原に茂るセンダングサ(キク科)の果實の先の鉤狀の刺毛なきよく衣服に着くものである。又オナモミ(キク科)も硬い刺毛を具へメナモミ(キク科)なきは刺毛に粘液を出し非常によく他面に着く。或は田の畦なきに繁るタウコギ(キク科)の逆鉤のある刺毛、ヌスビトハギ(マメ科)の果實の細毛、キノコヅチ(ヒユ科)の苞の先の刺狀物なき何れも他物に着く爲

の特別な仕掛である。

以上秋の野草の主なものを列擧したに過ぎない。野外の採集に、散策に折ある毎に野草にふれ、一本の草木に折いてもその名を知ること希ふばかりでなく、その生育地で生態を靜かに觀察するに興味が湧き、さうして無限の深みを感じるものである。一輪の野草花からでも充分秋の情趣を味ひたいものである。

好秋

「秋、秋、秋」と、編輯者は大層氣がつてゐるが、實際秋こそいゝ。それは晴れる時である。空の高い時である。小春日和のほかくと快い時である。うまい果物の熟する時である。小鳥の飛びかふ時である。

秋を悲しいと誰れが言ひそめたのか。少くもそれは子どもではない。子どもには、實る秋である。戸外の秋である。健康の秋である。

あなたの幼稚園の庭にも、なんと此頃のよき秋晴のあかるいことよ。

殘花聚園 (九)

(日本幼兒教育史資料)

東京女子高等師範學校教授

石川謙

七、才覺のちくすだれ

井原西鶴は、江戸時代上期の關西文學者の尤である。彼の小説は、最も寫實的な要素に富んでゐるといはれてゐる。然し此處に掲げる彼の文章が、其のまゝ事實であつたかどうかは問題ではない。彼の當時に於いて、彼の持つてゐた兒童觀が我々の興味をそゝるのである。「世間胸算用」(元禄十二年作)卷の五「才覺のちくすだれ」の中で、興味ある兒童觀を語つて次の様に述べてゐる。

「或人の息子、九歳より十二の年の暮まで、手習に遣はしけるに、其間の筆の軸を集め、其外、人の捨てたるをも取集めて、程なく十三の春、我手細工にして軸簾を拵へ、一つを一匁五分づゝの三つまで賣拂ひ、始めて銀四匁五分儲けしこゝ、我ながら唯者にあらずと、親の身にしては嬉しさの餘りに、手習の師匠に語りければ、師の坊此事を好しと譽め給はず、我此年まで數百人子供を預りて指南して見及びしに、其方の一子の如く、氣の働

き過ぎたる子供の、末に分限に世を暮らしたる例無し。又乞食する程の身代にもならぬもの、中分より下の渡世をするものなり。」

此の話は、九歳から十二歳の年の暮まで、手習にいつてゐた子供の氣働きに對する師匠の考へ方を對照して、二つの子供觀をくつきり、浮び出させたものである。親の方では生活の側から——將來の職業生活と現在の子供の氣働きを一つに繋ぐ單純なもの、見方から、大人になつた後の生活態度を中心として、それを現在に推し及ぼしてゆく素朴的な考へ方である。逆に云へば、現在がその形のまま、大きく膨れて將來に成るこゝに立て前から、子供の中に「大人」を見つけようとしてゐるかのやうに思へる。所が師匠の方は、一應大人と子供との心の働きをくつきり、區別して、子供の子供らしさから、聽て大人の大人らしさが「成長」するものであると睨んでゐるのである。随つて子供から大人への道は單なる一本條ではなくして、血の通

ふ「成長」が介在するのであると見てゐる。此處に兒童觀の大きな隔りが有り、進歩的な發展要素が潜んでゐるのである。

「かゝる事には様々の仔細ある事なり、其方の子ばかりを賢き様に思召すな。それよりは手廻しの賢き子供あり。我當番の日は言ふに及ばず、人の番の日も帚取々座敷掃きて、數多の子供が毎日使ひ捨てたる、反古のまろめたるを、一枚々々皺伸ばして、日毎に屏風屋に賣りて歸るもあり。是は筆の軸を簾の思附よりは、當分の用に立つ事ながら、是もよろしからず。又或子は紙の餘計、持参りて紙使過して不自由なる子供に、一日一倍増の利にて是を貸し、年中に積りての徳何程さいふ限無し。是等は皆それ々の親の智賢き氣を見習ひ自然と出る己れ々々か智恵にあらず、其中にも一人の子は、父母の朝夕仰られしは、外の事無く手習を精に入れよ。成人しての其身の爲になる事との言葉、反古にはなし難しき、且暮れ讀書に油斷なく、後には兄弟子も勝れて能書になりぬ。此心からは行末分限になる所、見えたり。其仔細、一筋に家業稼ぐ故なり。」

師匠の長い經驗と大勢を觀てる目からいへば、子供が子供ならぬ大人らしさをしらすく振りまわしてゐるのは、決して自然の状態ではない。家庭に於ける大人の生活

態度や、がつ／＼した生活競争への氣構へが、何時の間にかうつ／＼して、子供を子供らしさから引き離して、淺ましい大人らしい淵へ投げ込んでしまふのである。大阪人の抜け目のない生活意識が、小賢い生活手段となつて現れてゐる所を、大阪の子供の智慧才覺となつて出て來たものである。武士の子の武士らしさ、商人の子の商人らしさ、金持の子の金持らしさ、貧しき家の子の貧乏人らしさは、此の師匠の目からは何れも子の心の自然の働きではなくて、環境からおされた大人生活の空恐ろしい映像である。一應そうした環境を離れて、子供をどこまでも子供らしく仕立てる事は、其の時々の年齢に伴ふ自然の心の働を、力強く正しく充實させる道である。子供の頭の中に「大人」を宿らせるのではなくて、どこまでも子供らしい子供にする事が、纏て成熟しての後大人らしい大人をつくり上げる道である。

「懇じて親より仕繼ぎたる家職の外に、商賣かへて仕繼ぎたるは稀なり。手習子供も己が役目の手書く事は外に無し。若年の時よりするごとく無用の欲心なり。それ故第一の一手は書かざる事淺まし。其子なれども左様の心入、好き事さと言ひ難し。兎角少年の時、花をむしり、紙薦を上し、智恵つく時に身を固めたるこそ道の常なれ。七十になるもの、申せし事、行末を見給へ云ひ置かれ

し。師の坊の言葉に違はず、此者們、我世を渡る時節になつて様々に稼ぐ程成下つて、軸簾せし者は、冬日和の道の爲めに、草履の裏に木をつけて、履くこま仕出しられども、是も繼ぎて世に流行らず。又紙屑集めし者は、ちやん塊の土器仕出して世に賣れども、大晦日にも燈火一つの身代なり。又手習ばかりに精を入れたるものは、物毎疎く見えけるが、自然に大氣に生れつき、江戸廻しの油、寒中に氷らぬこまを分別仕出し、樽に胡椒一粒づゝ入れるこまにて、大分利を得て年を取りけるに同じ思ひ附きにて油土器に油樽に人の智慧ほぎ違ふたるものは無し。」

「兎角少年の時、花をむしり、紙薦を上し、智慧つく時に身を固めたるこそ道の常なれ。」といふのが、此の師匠の兒童觀でもあり同時に兒童教育觀でもあつた。『世間胸算用』の作者は、此の兒童觀が教育觀が、決して誤つてゐない事を、是等の澤山の子供の將來の生活に於て證據立てる。理論ではなく事實に於いて、かうなるものだ。力強く保證してゐるのである。軸簾を考へ出した子供は、大人になつて後それ相應の小さい智慧を働かせて、小利巧な工夫をこらした商賣を考へ出したものゝ大きな發展は遂げられなかつた。手習ばかりに精を入れて、子供の時には子供らしく育てられた子供は、成人して後に立派な商人に成つて榮た。

云ふのである。將來の生活が事實として、此の通りに變はるものかさうかを別として、かうした兒童觀が元祿時代に既に發達した事は注目すべき事である。

次に今一つ『本朝町人鏡』の例を引用して、大人の氣持に引きつけて、子供を眺める事の愚しさを説いた其の當時の主張をつけ添へて置きたい。

「いきさし生けるものに、子に迷はざるは一人も無し。何ほぎ愚に生れ付きたる子息にても悪敷さいふ事必らずなかれ、悪事かさなりて異見の杖を振あぐるうちにも、脇から取あつかふ人のをそきを恨むること也。殊更七歳より内の沙汰はたさへば左の手して箸を持ち、鐵槌にて茶釜たき割も氣のつよき所、男はそれじやぞ、箸も後には我に右に持つもの云流し、かりにも餘所の子のかしこきこきお出しにも致さぬことぞ。人の子の五歳にて大學讀むは耳に入らず。我子の十一になりて、竹箒にて鎗持のまねするを、手の振やうが善きまで客の有たびいたさせける。是等は人の事にて笑へき、其身に成ては、うつけたる子事々に利發に見へける。末々の者の子の自ら我儘に鈍なる事、母の親のふまところにて、そこゝに育てけるうちに、はや三歳の比より悪智慧付て是八十までなほらず。民百姓の子にても、付置きて育てさせたきものは乳母なり。諸事物入に是非無く、中分の下の身代

までは置かねけるも理りなり。給銀八十目、四季着て上下の帯ぶきころ紙手足の入用まで算用するに随分かなしき家の乳母にても、一人一年に銀三百四十五匁程は定まりて入るもの也。是によりて女房の乳を呑せける。中位なる人の内儀、十七八より縁に付き、其一させ二させのほきは櫻に藤に物見姿をつくりて、我男にもあれなれば堪忍比も見られ、跡のしれる盛形の菜は喰もせざりしに、ひさり子をもうけて我手に掛けてしめやしよもの物を干して、勾ひ目に移り、此子は身の行すゑの樂は思はず、何の因果に今やなきも無理なる事の口惜しく、それからは身を捨て芝居行き天王寺參詣もやめける。扱て身體を子のためさて、かせぐにはあらず。ひさり下子に子を抱かせてありく事をうらみける。今の世の心、奢に連れていなものにぞありける。」(昭和十四年九月十五日)

厚着豫防

秋からつゞくのは冬である。冬は寒い。その冬の厚着を豫防するのは、秋の一つの仕事である。風はひかすな。しかし考へもなく厚着の習慣をつけて、一層風をひきやすくするな。

厚着奨励の本家は家庭である。親である。お年寄りである。こゝにも、幼稚園の一つの心遣ひがある。

鷲と鮪

(古風土記から)

東京女子高等師範學校教諭兼教授 石井庄司

一
出雲國風土記、嶋根の郡、蛭蝮島に左のやうな古老の話が傳へられてゐる。

「出雲の郡杵築の御崎に、蛭蝮ありき。天の羽羽鷲掠り持ち飛び來て、この島に止まりき。故、蛭蝮島といふ。今の人猶誤りて梶島となつくるのみ云々。」

「天の羽羽鷲は、羽の廣く大きな鷲といふ意味であらう。古事記、上卷に「天之波波矢」いふのがあり、また日本書記、神代卷に「天羽羽矢」あり、舊事紀、天孫本紀にも「天羽羽弓、天羽羽矢」いふのが見える。古事記傳に、「波波矢」は「波張矢」の意味で、「羽の廣く大きなを云なるべし」とある。それによれば、天羽羽鷲も同様に解釋して差支なからうと思はれる。なほ古事記の「羽羽矢」は一説に、「空氣を切つて飛んで行く矢の意」いふのがある。それによれば、空氣を切つて飛んで行く鷲といふことになるであらう。こゝもかくも、こゝでは一羽の鷲が飛んできて鮪をさ

らつて持つて行つたといふのである。たゞそれだけで、主題は地名の説明傳説である。

ところが、出雲國風土記の本文には、これに次いで蜈蚣島のこゝがあり、「蛭蝮島にゐるた蛭蝮が、蜈蚣を食つて、此の島にきた。それで蜈蚣といふ傳説を載せてゐる。鷲と鮪と蜈蚣と三者の組合はせが、面白いと思つたので、一つの話を作つてみた。全くナンセンスな話である。鳥や獸と多くの動物を次々に引き出して、追つかけるといふ話は、岸邊福雄先生のよい話がある。それからも御蔭を被むりながら、自由に、想像にまかせて書いてみた。餘り貧弱で我ながら恥しい代物である。

たゞ筆者は、此の小話を書いてゐるる中に、明治二十六年シカゴ萬國博覽會に出品せられ色々の話題を投げかけた高村光雲作の名彫刻「猿」を思ひ起させた。もぎ取つた鷲の羽を前足に踏みつけて空の彼方を見つめる猿の姿は、昨年の冬、復興された上野博物館に出陳されてゐる。鷲はロシ

ヤの象徴さか。この話の子蟹や鮚にも何か現時の國際關係が象徴されてゐるを見るのは、あまりにお話の世界を冒瀆するものであるかも知れないが、また一面さういふことにも思ひ及ぶのである。しかし子供には決してそんなことを考へさせてはならぬことは申すまでもない。

たゞ本話は、餘りにまつしく、このまゝでは到底話せないものと思ふ。大方の寛恕を乞ふ。

二

ぼかぼかミ、暖かい日のおひるすぎ。

かはいゝべに色の子蟹が、ひさりであらよろちよろミ、濱邊へ出て來ました。

「おゝ、暖かい。いゝ氣持だ。」

ミいつて、砂の上に横になつてゐますミ、すぐ、こくり、こくりミのねむりをはじめました。

風はそよそよ吹いて通ります。海の波は、たらつた、たらつたミ、子守唄をうたつてゐます。子蟹は氣持よささうに、すやくと寝てゐました。

そこへ、海のたこ入道が、八本の足を立てて、のそり、のそりミ散歩にきました。

「いゝお天氣だな。よい、氣持だ」

ミいつて、歩いて行きますミ、寝てゐる子蟹を踏みつけてしまひました。

「唯だ！ぼくを踏みつけるのは」

ミいつて、子蟹は二本の足をふり上げて、たこ入道の足に噛みつきました。

おぎろいたのはたこ入道です。「痛い、痛い」ミさび上りました。それから「助けてくれ！大へんだ」ミいつて、大きな頭をふりたてながら、逃げて行きました。

此の様子をみてゐるのは、鷲です。一度にブーンミ急降下をして、濱邊へ飛んできました。そして、大きな爪で、たこ入道をつかみ上げるミ、すぐ空に舞ひ上りました。子蟹はまだ一生懸命、たこ入道の足に喰ひ付いてゐます。

わしは、遠い島の岩の上に降りて行きました。そして「おいしい御馳走になりますませう」ミいつて、たこ入道ミ蟹ミを見ました。そこへひよつこり出てきたのは、大きなお猿です。キャッミ一聲鳴いて飛びかゝつて行つたミ思ふミ、すぐに鷲の羽をもぎ取つてしまひました。そして、たこ入道ミ子蟹ミを海へにがしてやりました。

杜城偶感

保育に就いては僅かに半年の時日しか経験したこの無い私、其の私が思ひつくまゝ以下に述べる事は、恐らく、斯の道の識者のそしりを受けることばかりであらう。誠に僭越な振舞であるが、敢へて筆をこつた。

時局は益々優秀な人的資源を必要として居る。さなきだに人口減少の傳へられてゐる昨今、私達幼児教育に當るものは彼等の心身の健康に萬全の注意を拂ひ、その保全、増進に銳意心を用ひなくてはならない。其の方法としては最近、各幼稚園に於て種々考慮されて居るのであるが、其中で最も重視されてゐるのは、戸外保育をより多くなす、さいふ事であらう。而も、其の大部分は、自由遊びが占めて居る事は無論である。

蒼茫と續く高い空を見上げながら、直射する日光の下で清澄な空気を呼吸し、綠なす植物と適度の濕氣を保つ大地の上で、のびのびと遊ぶ幼児の元氣な姿を見る事こそ、私

達の限らない喜びであらねばならない。直射する日光と清澄な空気は、生育と智的開發の上に非常に必要な事は何人も首肯する所であり、又願はしい所である。併し凡ての幼稚園が必ずしも左様な現狀に置かれてはゐない。そしてそれは又如何にもなし難い事かも知れない。だが、ほんの一寸した心づかひでこそ達の健康の保全増進に幾分かでもたしになる事がありはすまいか。

或人が、「此處は幼稚園として特別につくつたのではなく、小學校の一部を利用したものですから何の設備もございません」。園庭を歩きながら大變謙遜しておつしやつた。ところが遊具は一通り以上、いや複雑なものさへある。だが、何と殺風景な庭であらう。植物は極端に乏しいし、その上乾燥した土から舞ひ上るあの不愉快な灰色の土ぼこりは何とも我慢の出来ないものであつた。——若し此の方が一挺の躑をもつて土を掘りおこし、幼児を樂しましめるさゝやかな草花でも、其の隅に植ゑたら如何であらう。土

F.

F.

壤も決して不適當ではないのだから。そして幼児と共に灌水し、ついでに庭園にも撒水したら、さうであらう。出来る事なら遊具の位置を考慮して、たゞひ其程廣くならなくても、少しでもより廣い自由廣場をつくることに努力したら良いであらうに。たゞひ何等の近代的遊具設備がなくて

も遊園はより良くせんとする心づかひのあふれた自由廣場のある事がよき遊び場の一條件ではあるまいか。私は此の杜の都さして知られて居る靜かな古城下に、かゝる殺風景な幼稚園を見て暗然たる思ひがあつた。こども達は何の爲に幼稚園に来るのであらう。あの子供達は今、抑へきれぬ生命の躍動を身内に感じながら近代的遊具の無關心的配置にその力を無意味に減じさせられてゐるのではあるまいか。たゞひ室内に於ける保育がすばらしく子供達をひきつけるものであるにせよ、私はあの子供達に同情しないではゐられなかつた。

二

「私は春の様にあたゝかい人間でありたい。私の目からも、ふさもらすこばからも心のあたゝかさが春の日ざしの様にあふれ出る人間でありたい。心の中には水の様に温かな心情が淋漓さうづまき流れ……人の心をゆたかに潤ほす様な人間でありたい——」。

かういふこぼをどこかで讀んだ事がある。私も、何時

も斯くありたいと念じてゐる。これが保母さしての最大條件ではあるまいか。

鋭敏な柔かい幼児の心を刺戟し、あの純真なまなざしに一抹の曇りを生ぜしめる様な心の持ち方、行動は慎しまねばならぬ、これは誠に當然の事である。併し其の當然の事が仲々行はれてゐるのではないのではあるまいか。保育は、こどもの心に保母の心がさけこんでゆく所から始まるべきいで居る。保育は決して他人對のものではない。保母さこどもの向上の問題である。

三

此の頃、倉橋先生は、「保母の教養」を題されて非常に有益な示唆に富むお話を發表された。保母程其の教養に於てまち／＼なものはないさうである。それは保母たり得る者の資格の廣さにもよらうが、又現制度の缺陷さもいへる。

さにかく私達は子供から學ぶと同時に古今内外の書物から大いに學ばねばならない、そして保育項目の各々の取扱ひは器用に行はれながら、何さなく自内に覺える頼りなさ心細さを解消してゆかねばならぬのではあるまいか。殊に私に於てさうであるさしみ／＼思つた事であつた。先生のあなたのお話は正に全國の保母に對する警告さもいへるであらう。

幼稚園と尋常小學校との連絡に

關する資料調査(中)

東京市保育會

(三) 體力方面に關する調査事項(調査表三)

事項	入學當初		一年後	
	回答校數	百分比	回答校數	百分比
體力は強い	四	三・六三	四二	五・七五
疲れやすい	八	二〇・三五	四	五・三
普通	二	二・七五	二六	三・三三
回答なし	一九	二四・六	七	八・七

(一) 體力

入學當初の實例及び意見

- 1、急に團體生活に入りたる一般兒童に比較して體操遊戲等の場合疲勞の度が少い。
(良二二)
- 2、體力は強い規則正しい生活がそうさせたか又は體育的訓練の賜か。
(良一〇)

- 3、幼稚園で遊び場所を與へ幼兒の好む遊戲により適當な運動をなすので體力強く困難も押し切り敏捷でこの點は出色の効果をあげてゐる。
(良二三)

- 4、體力の比較的強いのは先づ榮養方面に見られる次に概して體格がよい意志弱くして疲れたる如く見へるものもあるが強弱に比較すれば強い方である。
(良二一)

- 5、鍛練が不足である。大事にするせいではなからうか家庭がよいとあまやかすためか缺席者も多い。
(否三)

- 6、他兒と比較して健康でない。
(否三)

- 7、特に強いといふ事なく一般兒と同様疲れやすい。
(普一一)

- 8、身體検査の結果一般に圓脊の者が多い幼稚園に居た、めこもいへぬが入園中矯正してほしい。
(普一一)

一年後の實例及び意見

- 1、大差なし。 (普 八)
 - 2、依然良好。 (良 八)
 - 3、遊戯運動に對する興味あるためかよく運動を好み従つて體位向上見るべきものあり。 (良 一一)
 - 4、四時間の勉強でも少しも疲れた様子がない缺席も殆どない。 (良 三三)
 - 5、順調に發達してゐる精神力を相待つて體力の發達は遠足なごの時に於てその發達過程を見るこゝが出来る。 (良 一一)
 - 6、團時代の塾居生活を離れて外的生活をうけ野外生活を多くしてゐるためか體力は益々よくなり運動機能も敏捷で競走なごで一着を占めるのは多く幼稚園出身者だ。 (良 一一)
 - 7、健康上より來た物にあき易い性質が次第にうすれて來た。 (良 一一)
 - 8、一般の方が強い。 (否 一一)
 - 9、體操の見學をする者が多い。 (否 一一)
- 批判及び反省
- 幼稚園児と一般児との體力を比較の結果回答七十八校中強いもの四十九校にて六二・八二%を示し一年後依然として強きもの四十一校五二・五六%にて八校少くなつて

る。 (中幼稚園組は二校とも體力の強きを認めてゐるある區の幼稚園組は意志の弱きものありさいひある區の幼稚園組は持續力があるさいふ、同じ幼稚園組でもある區は知識階級の子弟多く相當の家庭にて學習態度の回答に於ても意志が弱いさいひ(餘り家庭で手が届きすぎると)その點體力にまで及ぼしてゐると思はれるが、家庭を充分連絡をこつて母親が指導をしたならば救はれることと思ふ。何にしても幼稚園児が入學當初一年後共に半分以上も強いさいふのであるから一層幼稚園にても注意し家庭を協力したならば一〇〇%強いとの回答に接するものも近いであらう。次に一般児と同じとの回答が入學當初は二校二・五六%一年後は二十六校三三・三三%となり二十四校増加してゐる。實例によれば初めは團體的訓練が出来てゐる爲疲れないが一般児も一年の終りには學校生活になれて來たため幼稚園児との差別がつかなくなり二十四校から一般児と變りなしさいふ回答を得たわけであるが幼稚園児が初め疲れないで樂に出来るだけでも一般児より幸福である。ある學校では病缺が多いさいひはれるが又ある區の何校かは缺席者殆どないこの回答を得てゐる。又ある學校では家庭がよいさいふあまやかすから鍛練が不足になつて一般児の方が強いさいひはれてゐるが他の學校では家庭の注意が行届くから榮養方面もよろしく體格

も體力も強いとの回答を得てゐる所が澤山ある。幼児の家庭が豊かな爲に人手があり鍛練が足りない其の他實例の示す圓脊の子供が多い。持久力を缺く疲れやすい等の聲も一應考へねばならぬ問題である。人手があり行届く家庭であれば母親又は指導者が心して育てれば良習慣がつき鍛練もされる筈である故に保母は幼児を通じて家庭の指導をなすと共に一層緊密なる連絡の下に刷新を計らねばならぬ。又一方には持久力、持續力があるといふ學校側の聲も相當大きい故幼稚園全般から見れば心配する必要もないと思はれる。幼稚園時代の保母の心構へで疲れぬない幼児が多い事も實例が示してゐる以上意を強くして可なりであるが、未だ手廻りかねてゐる園もなきにしもあらず大に心して幼児ながらの鍛練をなし、身心共に健全な日本人をなすの芽を培ふ事こそ我等の重大な任務の一つである事に自覺して日々の保育に當らねばならぬ。保母が何事に對しても手傳ひが過ぎはせぬか氣持の上のいたはりだけにして餘り手を貸さない方が望ましい。殊に年少組だからとていたはり過ぎて初の躡や鍛練を忘れてゐるやうな傾も見受けられる。大に反省せねばならぬ。一枚だけではあるが圓脊の子供が多いといふ事は全般的に注意を呼び喚したい。食事、製作、話を聴く、遊戯等、あらゆる場合絶えず注意して骨の軟かい時

代習的に正しい姿勢をするやう努力を要する問題と思ふ。尙専門家に相談して榮養方面に留意して定期健康診斷を致す外常に外貌より健康状態を察して適當の方法を講ずる等必要である。

最後に希望する所は入學當初の授業時間を今少し延長し遊戯其他競技的な遊びをして學校の先生方も友達といふ氣持で遊んでいたゞけたなら體位向上の上にも兒童の性質を知る上にも好都合でないか新學期の度に考へさせられる事である(或はそれ以上に實施されて居らるゝ學校もあることゝ思ふが希望として附け加へさせていたゞきたい)。疲れ易い兒童が入學當初八校ありしに一年後には七校に減じたこと等から見ても小學校一年擔任先生方の御努力の程が感ぜられる將來さも一層御盡力をいたゞき、よりよき保育を心掛けて身心共に健全なよき日本人を一人でも多く世の中へ送り出したい念願である。

(四) 小學校に於ける幼稚園児の取扱

- イ、特別なる指導をなす (一五)
- ロ、特別なる指導をなさず (一九)
- ハ、其他 (五四)

(一) 學習指導上

- 1、一般児と同一の取扱をなし特別な考慮をして指導しない。 (二五)

2、一般兒の(級の)中心人物として他兒を指導して行く。
(一一)

3、急激な變化を與へぬ様に徐々に學習態度を訓練する。
(七)

4、幼稚園での遊びを中心とした子供の生活を活かしながら其の中に學習を織込んで行く。
(一一)

5、合科的取扱をする。
(一一)

6、保育材料も重ならぬ様、學習に新鮮味あらしめ興味の持續をはかる。
(三二)

7、進んだ教材を取る。
(一一)

8、文字教授に際しても筆順など正確にやつて、あきさせない様にする。
(一一)

9、在園當時の習練による唱歌、遊戯、手工等の成績を益々向上する事につまめる。
(一一)

10、先走りせず根氣よく學習するやうに。
(一一)

11、保育によりて養成された自然の愛好心、審美心、創作力、構成能力等を小學校の時間割、學課等による規律的、組織的生活に破壊せざるやう努力す。
(一一)

12、幼稚園の延長と思はせず皆と一緒に出發することを注意する。
(一一)

13、經驗が豊富なため模倣的傾向があるから創作的に指導することに努力する。
(一一)

14、幼稚園保育を眼中におかず、白紙状態のものとして出發す。
(一一)

15勝手に離席するもの 勝手に發言するもの、數は却つて家庭兒より多いが急に抑壓すべきでないを考へてゐる。

それが兒童の自然であつて先生を恐れ虚疑の態度を取る家庭兒にあり勝ちな嫌味がなく子供らしく育てられてゐると思ふ。
(一一)

(2) 訓練上

1、我まゝにならぬ様、規律よくさせ、遊ぶことゝ學習することゝはつきり區別させる。
(四)

2、保育によりて得た團體的訓練及その他の長所を基礎として個性を伸し兒童の生活を發展させて行く。

3、知つたふりをさせぬこと。
(八)

4、幼稚園にて保育された訓練方面を一層伸展させてゆく。
(七)

5、他人に對して世話をやき過ぎぬやう指導なす。
(六)

6、幼稚園組みなつて一つのグループを作らぬやうに。
(四)

7、持物を大事にするやうに。
(三)

8、忍耐力の養成に努め、物に社會に、人に對して感謝
(一一)

8、忍耐力の養成に努め、物に社會に、人に對して感謝
(一一)

の念を深め形の上の禮儀作法を更に精神的に指導す。

(一)

9、他人を馬鹿にせぬやうに、又親切であるやうに指導する。

(一)

10、依頼心を斥け自己の力を充分發揮せしむる様努力する。

(一)

(3) 環境上

1、他兒との交友關係に留意す。

(四)

2、家庭兒の美點を取上げるこゝによりて、幼稚園兒の反省を促す。

(三)

3、個性を尊長し純心を傷けぬ様に。

(二)

4、身體養護に於ける良習慣及情操的部面を助長し、他生をして追隨せしむる様留意する。

(二)

5、自治的態度の育成に努むるに、極端な干渉をさける。

(四)

(4) 其他

1、父兄にも幼稚園に對する認識を是正し小學校一年の仕事と幼稚園との區別を判然させるやう指導したい。

(一)

2、入學當初は特に一般兒童の指導に重きをおくため、尙一學級六十名もある現在に於ては幼稚園保育を受けた兒童に對する積極的指導は遺憾乍ら不十分である。

(一)

3、小學校に於ける指導に順應する傾向が少いので、一日も早く、學校生活に馴れさせるやう留意する(小學校と幼稚園の指導に懸隔をみこむ)。

(一)

(以下次號)

幼時の追憶

—その一、断片—

はしがき

牧場も森も流れも大地も

眼に觸れるものすべて

天上の光に包まれ

夢さながらの輝きと鮮かさに蔽はれた時があつた。

けれど、今は昔と異なり

夜も、晝も

何處を向いても

嘗て見たものを見るこゝが出来ない。

虹は現れては消え行き

薔薇は愛らしく

空は雲なく晴れ渡る

月は喜に充ちてあたりを照す。

星づく夜の人は

三八

曾 根 保

いとも美はしく清らかだ。

太陽は輝き昇る。

けれど、今は印度へ行つても

榮光は地上から消え失せてしまつた。

——ワーズワズ作「幼時を追憶して不死を

知る歌」より

私は機會が恵れまたら幼少時代の想出を綴つてみたい。かねがね思つてゐた。もはや自分自身の將來には大して希望は持ち得ないし、また、娘の前途にも、樂みより心配の方が大きいやうに思はれるので、私の夢の世界をいへば、むしろ、追憶、特に幼少時代の追憶に限られてゐるやうである。まことに心細い次第ではあるが、それだけ私も年を取つたのである。私は幼くして父を失つたために青少年時代に於いて既に人一倍苦勞をして來た。しかし、その苦い

體驗にも今日では甘美の味がまつはつてゐて、これこそ自分の實だといふやうな氣がする。そつこ藏つて置いて、獨り樂めばいいのであるが、やはり時々は取出して人にも見せたこともある。が、愈々人前に出さねばならぬことになる、多少躊躇せざるを得ない。経験そのものは、これも尊いものばかりだと思ふのであるが、それを表現する能力が自分に缺けてゐるため、却つて誤解を招くやうなことになるはしないかと思ひ恐れるのである。つまり、こんな経験もした。こんな苦みにも打ち勝つた、こゝろを語る場合、下手な書き方をすれば、如何にも自負してゐるやうに考へられることがある。はしないかと思ひ心配するのである。この間、武田祐吉博士から近刊『女身萬葉』をいただいた。早速繕いてみる、前半には可成り多くの自叙傳的隨筆が織込まれてゐて、特に、その中の「蛙を捨てる」なごの書き振りにには心憎いばかりのものを感じた。私は、元より文章道にも暗く、先生のやうに巧に自分を語ることは到底望まれないし、また、私の歩んだ幼少時の路が決して期からな明るいものではない。結局、自分のあらをさらけ出して人に笑はれるのが落ちであらうと思ふが、こゝに思ひ切つて、その難事業を敢てしようとするには一つのはつきりした目的があるのである。すなはち、四十年の生を享けたといふこと、それ自體が私の場合には相當不思議なこと、大げさに言へば奇蹟なのである。

これは、やがてお分りになるが、普通の子供よりも病弱で、好き嫌ひもひどく、至つて我儘、強情なばかりでなく、屢々大病に罹つて生死の間をさまよつた私の爲に、いつも一緒に苦み、絶えず祈つて下さつた母があつたからである。この慈愛深い母の故に今日あることを思へば、私は一生の願ひして、たつた一人の「母」を心ゆくばかり語つて、人目には愚かしいことかも知れないが、世界一の母を自慢してみたいと思ふのである。國學院大學の同僚に渾大坊小平といふ雅號のやうな名前をもつた教授がある。私がこの人の名前を初めて知つたのは十數年前『女性』といふ雜誌に載つた小説からであるが、その後同じ大學に勤めるやうになつて、この教授が里見禪氏の弟子で作家であることを知つた。或る時、渾大坊氏は、「さ、やかな自分の爲に女性として耐えられぬほどの辛慘を嘗めて私を養育してくれた『母』を小説に書いて死にたい。これが、自分の一生の願ひだ」と語られた。私は同氏のやうに作家として経歴も無く、元より手腕も無いが、その時私はその願を羨しく感じ、いつかは自分も曲りなりにでも母を描いて、大いに母を讀ませてみたいものだと思つた。今こゝで自分の幼少時を語らせていただくのを機會に、長年の願の一端をも叶へさせていたゞければ望外の幸である。これは全くパーソナルな勝手な記録で、特にこの初の部分なごは極めて断片的であるから、讀

者諸姉には全く興味の無いものであるかもしれない。

生れた家

こゝは四國の山の中、宇和島から十里奥、中江藤樹先生
で有名な大洲の町から肱川を五里遡つた一農村、東宇和郡
横林村である。私の生れた家は現存してゐるが、八年前に
行つた時には醬油醸造場になつてゐた。想出は更にそれか
ら三十年も遡る——

家の前に廣い通りがあつて、向ふ側、すなはち北側には
石垣が高々登えてゐる。元來石垣といふものは子供の登
るためにも造られたやうなもので、子供ミ石垣、これは田
舎の腕白小僧には切つても切れぬ關係がある。都會の幼稚
園や小學校の庭に鐵棒で組立てた櫓のやうなものがある
が、あれを見た私は、その餘りに情ないのに啞然としたこ
こがある。まるで鳥籠の中の止り木程度のもので、都會の
子供の哀れさを見せつけられたやうな氣がした。中學時代
に二十丈もある瀧の傾斜面を聲に柴を敷いて迂り降り、夏
の一日を遊び暮した私などは、あの遊園地の迂り臺を見る
ミ可笑しくなつてしまふ——大分話が亂暴になりかけた
が、正直なところだからお許を願ひたい。ミここで、石垣
の話だが、大抵の石垣なら登れる私も、家の前の石垣は殘
念ながら登つた覺えが無い。それは恐らく、たゞ高いばか
りで頂上の見晴しが全然無かつたからであらう。子供にで

も、そんなこゝはよく判るのである。松山の中學時代に城
山に登つて、あの特に高い石垣を登つてみようと思つたが、
長い年月の間に地盤が馳んだのか、中程が土臺と同じ位氣
味悪く外にふくれ出てゐるので、流石の私もこれには手の
出しやうがなかつた。私はこの石垣のつてつてよく漢文
を勉強した。漱石の「坊ちゃん」で名の知れた松山中學在學
中の出來事はいづれ後日御披露に及ぶこゝにしよう。

さて、家にはいるミ、玄關には裏まで突抜ける土間があ
り、右側の一間幅の長い板敷には馬の鞍が置いてあつた。
また同じ側に往診の駕籠もあつた。天井に吊つてあつたや
うにも思はれる。しかし、はつきりしない。玄關の左手は
疊の間、次の部屋が診察室、その次が藥局であつたと思は
れるが、私の記憶では、既に診察室には甲冑が五つ六つ立
ててあつた。五つ六つの頃のこゝであるが、かくれんぼ
をする時この一つに身を隠すのが面白く、また探すにも一
つ一つ覗いてみなければ胴の下にへばりついてゐるのが
見つからなかつた。玄關から奥の間へ右に折れるミ突當り
に二階へ通ずる階段があつた。上から轉げ落ちて足を挫い
たこゝがある。階段の左手が廣い座敷で、私の幼時の記憶
は實はこゝから始まる。誕生の日から今述べようとする日
までは全く、ブランクで、私のものではない。母のものは
あらう。また戸籍面では生きてゐるのであるが、私には

「無」も同様の數年間である。ワーズワスの有名な「虹」の詩
み空にかゝる虹見れば

わが心は躍る——

いのちの初めにしかありき

大人みぢになりたる今しかり

老いらくの日もさあれかし

の中の「この初め」(When my life began)を説明するのには、私は「いさげなき日に」が「われもの」のころつきし時」こゝかに言ひ代へてもいい言ふが、それは私が自分の生命が一體何日始まつたか考へる時、初めて完全に解釋がつくので、作者の用意のほごも忍ばれて全く敬服に耐へない。實際私にまつて私の生命の始まつたのは、最初の想出の存するところからである。

奥座敷も庭との間に椽のついた横長い明るい一室があつて、お客があるところまで食事が出た。その右手は板の間で臺所に通じてゐる。左手に座を直角に圍んで便所も湯殿に行く廊下が長々續いてゐる。淋しい廊下で、うす暗い臺所も同様私の一番嫌ひだつた場所である。この廊下のつつきに隣に通ずる入口があつて、「お八重ばあさん」いふおばあさんが住んでゐた。庭の空は一面に葡萄の棚で、葡萄の熟する頃には二階の屋根から思ふ存分ちぎつて食へてゐた。蜂が随分澤山集つて来て、葡萄棚には蜂の巢も澤山

あつたやうに覺えてゐる。湯殿の前に大きな棗の樹が枝を張つてゐた。干大根が眞白にかかつてゐるこゝもあつた。

棗の樹の根のころから段々を降りて行く大きな納屋があり、その左の端に馬がゐた。厩から裏の畑へ出るさ淺い谷を隔ててお寺へ通ずる道路が向ふに見えてゐた。その道路をかなり行つたころに父の造らせた大きな池がある。

それが出来上つた時にお祝もあつた。が、打角田の水を貯めるために掘つた池にさういふわけが殆んど水がなく、何かの祟りではないか大騒ぎをしたこゝがあつた。

棗の樹の前は廣い裏庭で、よく薙が敷いてあつて何か乾してあつた。臺所を出て、この空地を右へ折れる古井戸がある。幼い頃の神祕の井戸で、少年時代に讀んだお伽噺の中に出て来る井戸といふ井戸は皆この神祕の井戸に關聯する。覗くさ冷い風が顔を撫でる。深い深い底の鏡に自分の顔が宿つて見える。釣瓶の太い棕櫚の繩はいつも濕つてゐて、握る手を刺すやうだつた。井戸がへの日には突立つて見てゐた。だんだん濁つた水が出るやうになつて、しまひには籠、笠をつけた人が綱につかまつて降りて行く。幼い私には、何處か雨の國へでも探險に行く人のやうに思はれた。暫くするさ匏丁だの、お茶碗だのが出て来た。もつさ不思議なものが出て来ててもよささうに思へたが、寶らしいものは出て来なかつた。

父の臨終

さて、奥座敷へ戻る。父が南を枕にして寝てゐる。その顔は覺えてゐない。枕許に母と數人の村の人が集まつて大變な騒ぎである。母が父を呼んでゐる。來てゐる人も「曾根君、曾根君」を呼んでゐる。父の臨終なのである。私は數へ年六つ。母のゐる方の枕元近くで、モロブタにはいつてお舟のつもりで遊んでゐた。「ギッコン、ギッコン」を獨り言をいひながら、これだけが私の記憶にある父である。父の容貌は寫眞によつて知ることが出來、また、上から二番目の兄が顔も身體つきも父にそっくりだ、よく人が言ふのを聞いて、大體想像することは出來るが、私にまつては極めて不満なものである。父はその時四十を越したばかり、母は三十五歳ではなかつたかと思ふ。今日四十を越した私が三十五歳の婦人を見るに、如何にもまだ若々しいといふ感じがするが、母はその若さで、中學生を頭に五人の男の子をかかへて、健氣にその三十年を全く子供の爲に捧げたのであつた。尊い極みである。

こゝに私がすつこ以前に書きなぐつたものがある。題して「父の聲」といふ――

まるで深い海の底だ、

夜更けてそつこ眼をあくこ

薄暗い蚊帳の中は青い潮で一ぱいだ、

何處からかさし込む一條の光

「おーい」を呼んでみても海は深い。

×

青い蚊帳の中でそつこ眼をつむつてゐるこ

故里ふるさとのわが家

大屋根の葺が光つて見える、

既の馬の嘶きが、

レグホンの大群が、

葡萄の柵に

棗の大樹に

大きい兄、中の兄、小さい兄の聲が、

かすかに聞えて來る。

私をおんぶした母が

大聲で何かしら屋根の上の下男に叫んでゐる。

一條の光をたよりに數々の部屋を探し求めてみても

父が居ない。

既にも、納屋にも

そして賑やかな夕餉の食卓にも

私の父は居ない。

×

青い蚊帳の中でちつこ視つめてゐるこ

ちらちらこさし込む光の浪に

青白く眠つてゐる父の顔が
微かに浮んで来る。

頬骨の高い、眉毛の太いその顔
いや、それは私自身の顔だ。

消えよ、浪よ、掻き消してくれ
もうこの醜い顔は充分だ。

私が一心に耳を澄まし

あこがれて追ひ求めるものは
大きい兄、中の兄、小さい兄に恵まれて

私にだけ拒まれた父の聲だ、

世の中でたつた一つ私にだけ聞えない父の聲だ。

×

青い蚊帳の中は

深い深い海の底だ。

重い鈍い響が海的面から傳はつては来るが
こんなに深くしてはさうにもならぬ。

身體中を耳にして聽いてゐても

頬骨の高い、眉毛の太い青白い顔が
ゆらりゆらり揺れる海の光を通して

ちつと私を視つめてゐるばかりだ

「おーい」を呼んでみたが、

海は深い。

×

そのやうなわけで、私は父の死に對して何の悲みも、涙も知らない。自分に父があつたと思へばあり、また無かつたと思へば無いやうな存在でしかない。だから「親に孝」いふ修身の話を聽いても、少くとも私には母親のこころしか考へられない。父親に對する愛を知らうさしても知りやうが無い。思へば不幸なこころではある。後に聞いた話であるが、父は隣村のお祭に招かれて、無理強ひに何か食べさせられた。そして「松のこえ」いふ峠で氣持が悪くなり、馬の上から墮分嘔いたさうである。後年私がその峠を見せ一緒に越した時、兄はこの邊で父が苦んだのだと教へてくれた。また、その時、「お前を一緒に馬に乗せて、こゝをよく通つたものだ」とも話してくれた。父はそれから床に就いて遂に起たなかつた。十月五日が父の命日である。私の記憶は當てにならぬかも知れないが、父の死後、引續いて祖母が亡くなつた。祖母は父の弟の家、すなはち、そこが先祖代々の家なのであるが、私の父は醫者になつて町へ出、家督は、同じく大阪で醫學を修めてゐるうち病を得て國に歸り百姓になつた弟に譲つたので、祖母は弟の家で亡くなつたのである。父と祖母との二つのお葬式を一度に出すやうになり、父のお棺が輿座敷の片隅でその日を待つてゐなければならぬ仕末になつたらしい。お棺の置いてあるところの

疊がめくつてあつたことを記憶してゐる。折悪しく大雨が打續いて途中の土橋が流れ、祖母の遺骸が僅か一里半の山道を運ばれて來るのに大分手間取つたので、お葬式の日取がすつかり狂つたさいふ話であつた。お葬式の當日も空はまだ荒れ模様であつた。大きな松の木の多い墓地へ、皆が黙々として一列になつて、うねうねした狭い坂路を登つて行つた。

更に遡つて

私の幼時の記憶は、實は、父の死より一年前、すなはち五つの年に遡ることが出来る。しかし、これは全く夢のやうで、母からの確認が無かつたならば私のものではないのである。それは想ひ出しても美しい繪のやうな場面は何處かのおばさん、母、私、三人で小舟に乗つてゐる。青い水の上で舟が少し搖れてゐる。舟は岸に著いた。見るこゝ、急な高い石段が白く水際から上に延びて深い森の中に消えてゐる。白い石の鳥居があるからお社であらう。舟の中で三人はお茶をいたゞいてゐる。茶器が三人の真中にある。

おばさんといふのは、この物語で後に出て來る「灘のおばさん」である。この場所は、父の臨終の場面には大變違つた、伊豫灘に面した一漁村、伊豫郡上灘村である。神社は今日の町の中心から十丁ばかり南に在つて、先年訪れてみるこゝ、その石段の中程のこゝろを汽車が横切つて走つてゐる。

た。

五つの時の事で私に覺えがなく、しかも事實あつたこゝが一つある。兄の家に、明治の初期を想はず椅子を挾んで、可愛い人形をつくりの男の子、女の子が各片手を椅子に置いて寫つてゐる寫真がある。その片方の男の子が私である。女の子は私と同年のいゝこで、後に私の兄の妻となつた。この寫真は宇和島で撮つたものであるから、考へてみるこゝ、私は父の亡くなる前年に母の里、宇和島へ行つてゐるこゝになる。これが上に述べた「灘のおばさん」の家へ行つた時、先か後か、私には分らないが、交通の便、その他のこゝを考へるこゝ、さうやら先のやうな氣がする。灘の海は夏以外は小舟で遊ぶほゞ靜かな日は稀であるから、宇和島へ行つたのは五つの年の春頃かもしれない。宇和島へ出る十里の道は山又山で、少くとも大きな山を一つ越さねばならない。微かに頭に残つてゐるが、男、しが前の籠に私を入れ、後の籠に着換や土産を載せて、かついで行く。背の高い脚絆姿の母がすぐ私の前を歩いて行かれる。

「道明さん」と鐵山先生

母が「道明さん」が、さうした、かうした話をするのでよく聞いた。「道明さん」といふのは先年亡くなられた元女高師教授の簡野道明氏である。父の在世中に村の小學校の教師として來られ、お互にぎちらも「先生」であつた關係か

ら親交を結ぶやうになつたのであらう。家では「道明さん」の面倒をよくみてあげた。それで、私達一家が東京へ來て落ちぶれた時には、快く兄弟の一人を引き取つて養つていた。「道明さん」が村にゐられた頃、私の家には父が大坂から招聘した鐵山先生といふ書家が居て、毎日家内中に書を教へてゐた。私はまだ年が行かぬので習はなかつたが、兄達は學校から歸るご毎日墨磨りをやらされて、少からず閉口してゐたやうである。

父の兄弟は四人、妹は一人であつたが、皆能書家で、若死をした末弟なごは特に山陽の眞似が得意であつた。屏風に残つてゐたこの叔父の書を後年商賣人が山陽の眞物として皆買ひ取つて行つた。父は、人の言ふごころでは、當時「伊豫の三筆」の一人として高名だつたごの話だが、眞偽の程は分らない。しかし現存してゐる書を見るに全く玄人の域に達してゐるから、相當達者であつたご考へてもよい。「道明さん」にきいて置けばよかつたが、たうごう機會を逸してしまつた。實は、白山御殿町の「道明さん」の家で世話になつてゐた兄も、同家に厄介になるのをひきく嫌つて飛出し、その後兩家の行きも途絶えてゐたので、私も色々父のこゝを聴きたいごは思つてゐるが、その折が無かつた。しかし、數年前、國學院大學で私の教へてゐる組に、ごうも縁者らしい名前が出席簿にあつて、きいてみるご果

して「道明さん」の孫であつた。お孫さんは蒲田のお祖父さんのアドレスに略圖を添へて是非訪ねてほしい、心臟病で寢たり起きたりしてゐるが、話しに來て貰へば喜ぶから、ごいはれるので、面接の日を樂みにしてゐるうち、私の怠慢から、たうごう貴重であるべき機會を逃してしまつた。父の歿後三年して、母が親戚の反對を押切り、家を片づけ、大舉して東京へ上つたのには、一つには「道明さん」や村松恒一郎氏その他の友人が東京に於いて既に成功してゐられたから、心強く思つて決行したのではあるまいかと思はれる。尙簡野道明ごいふご悪口を言ふ人もあるやうだが、吾々曾根家の者にごつては「道明さん」は一つの力になつて働いてゐたごは否定出來ないであらう。今また私が同じ女高師に職を奉じてゐるのも奇しき因縁ご言はなければなるまい。

この夏

倉橋生

大阪

去年からの約束で、六月二十一、二の兩日、大阪府私立幼稚園聯盟の講習にゆく。井澤會長、和田副會長、海野氏、高濱氏、中根氏其他のいつものながらの熱心に敬意を禁じ得ない。たゞ此の熱風と煤煙との現代大都市の夏は、この夏の旅の最初をおさしつけた。新大阪ホテルに同宿の戸倉さんが、ゆうべは暑くて睡られませんでしたといふのを、それは、あなたが痩せてゐらつしやらないからださからかつてみたが、それは自分にも言つてみてゐるこゝである。また來年もこの約束だが、さうぞ、もう少し涼しいやうに。

安城

これも去年からの前約、二十三、四、五の三日間郡教育會の教育學講習である。日本のデンマークにして、その名の最も高いあの安城の町である。去年から印刷物なごで一

寸豫備知識はある積りでも、如何んせん農業經營のこゝの皆目知識のない此の視察者には、視て見へず、深くも廣くも察することも出來ず、説明されて感心するだけだが、學ぶまゝの素より多い。たゞ到るまゝで、ヒットラー、ユーンゲンドの來訪を、村の誇りらしく語られるのは、デンマークらし過ぎて、日本の安城らしくもないこゝに思はれた。これは話がよこへそれが、安城町で、何よりも貴い事跡は、都築彌厚翁の水運開拓の大事跡である。私は最も深い敬意を以てその明治川神社に詣でた。

東京

歸つて來るまゝ、日本幼稚園協會の保育講習の仕度が出來上つてゐて、早速二十七日から開始。こゝでは私は主人役で、三十一日まで自分の暑さよりも、六百の會員諸君の暑さばかりが氣になつた。暑い南九州から來た人々もあれば、涼しい北海道から來た人々も數多くある。夏の旅に歩

き巡る身に覺へのあること、何よりの御馳走が涼風涼味だから。それにしてもいつも思ひながら、おそうそうで相濟まないことばかり。ここしも、朝鮮、臺灣、滿洲も、遠く海を越へて來て下さつた方々をお招きして、樹下の小集を催したゞけであつたが、よく語り、よく歌つて下さつて、楽しいことであつた。

引つゞいて、八月の一、三、昭 and 保姆養成所の講習で時局を語つた。

河口湖畔

八月二日、河口湖畔の長瀬家事科學研究所の家事教育の夏季大學に行つた。さすがにこゝは涼しい。富士を仰ぎ湖を眺める丘の上の小學校が會場で、語るものも聴くものも涼しい。幼稚園協會の講習も、こゝういふところで開いたら、しみじみと思つた。午後、湖めぐりのドライブを、會員諸君と共にしたが、その中には全國から集つた、女高師の家事科出の人も少なくなかつた。

岐阜

岐阜といふよりも實は、長良川ホテルは私の好きな旅宿の一つである。町をはづれ、あの水のきれいな長良川に沿ふて、瀟洒な木造の此のホテルは、見るからに旅の氣をら

くにさせるものがある。アツコンモードシヨンの完備は要求すべくもないが、どこまでも軽い感じがいゝ。殊にベッドから窓越しに對岸の山が見えるのは勿論、河原のさら／＼とした流れが見えるのが何さも云へない。名所つぼくなく、名所顔をしないところが何さも云へなく氣に入るのである。

こゝは、此の後の、京都、水戸、新潟、盛岡、札幌共に、青年學校新要目の解説のための文部省主催の講習なのであつて、その方の時間は、四日五日さ汗をかいいたのであるが、この宿は涼味に充ちてゐる。今年の鵜飼は、流石に例年の如く派手な陽氣なことは自肅されてゐるが、見物船の数は近年にない多數で、賑かであつた。

津

岐阜から名古屋まで汽車、それから電車で津にいつた。こゝの保育講習のために先きに來てゐる及川さん、小島さんが保育會長の鈴木武治氏と共に電車の驛に迎へて呉れた。旅で家族に會つたといふことだ。

津の保育會の諸君は誠に熱心である。殆んど毎年、私達の方の人を招いて、遊戯や手技の講習を開かれる。今年はそのために私の講義が加へられた譯である。鈴木會長や、縣社會事業協會の大久保徳五郎氏や、それに山田さん、横部さ

ん、其他各幼稚園の保姆諸君の熱心には敬服する。六日、私の講義してゐる午前に、及川さん、小島さん、神宮さん、参拜をせられた。私は午後に参加した。この講習のお蔭で誠に機会を與へられたことは嬉しい。

京都

京都の鴨河沿ひの宿へ著いたのは六日の夕である。早速河原へ張出しにかけられてゐる床へ出て夕涼み、洒落た。東山の眺め、河原の灯、いつ見ても趣が多い。

そこへ大塚喜一君から電話が来て、城糞幼稚園の主任保姆鹽崎たまさんの長逝に驚かされた。鹽崎さんは、大阪女子師範附屬幼稚園時代の古い懇意で、京阪保育界の中心として大切な人であつたのみでなく、その人柄が得も言はれぬ好ましい人であつた。さつぱりした氣前へを、いつも陽氣にしてゐられたが、その生活は公私とも、見上げる程しつかりしたところのあつた人である。實に哀惜にたえない。たゞ私としては、こうして圖らずも葬儀に列するこの出來たのが、せめてもの慰さめであつた。そこで又、京都の幼稚園の人々に多くおあひした。

講習會の會場は知恩院にあつた。そこで私は所望してお精進の御馳走になつた。御馳走いへば京都幼稚園の岩井博美君の御案内で、有名な瓢亭の朝粥の御馳走になつたの

は、最も風趣深いものがあつた。京都はやつぱりいゝ。

岡山

九月京都をたつて、十、十一、十二、準故郷岡山の人になつた。吉備保育會の講習で戸倉ハルさんも同行である、いつもながらお元氣な會長國富友次郎先生、副會長片岡定四郎氏、その統卒の下に、手を揃へて働かれる各園主任保姆の方々、岡山は、やつぱり日本の幼稚園の大殿堂である。

私はここで、幼稚園保育が、その形態に於て、保姆の態度に於て、つぎめて、角ばらぬやうに、もつこくらくに行はれてゆくべきことを説いた。保育が研究的に發達して、整頓され、系統されて來るについ、こうした點に於て、妙に幼稚園型といつたものになり易い。私達は、保育者の方の熱意を尊重すると共に、幼稚園をいつも、子ぎものものにして置くことを忘れてはなるまいと思ふ。

こんなに研究的に發達してゐる此の土地なればこそ、こんな話も特にしたし、出來たのである。ごきごきでも大人の幼稚園へ子ぎもを招いてはならない。われわれが子ぎもの幼稚園へご出かけるのである。

閑をひろつて、片岡氏と土光氏まで、臥龍松へ、伊部へ、それから閑谷翁へ案内して下さつた。臥龍松は宏大な庭地を匍ふて四方に枝を擴げてゐる奇松である。話には聞いて

るたが、こんなことは想像も及ばなかつた奇観である。伊部は古來天下に有名の陶工地、その特有な堅牢色を強固な色調は他に比を見ないのであるが、今日は土光氏舊蔵の名陶工の湖畔の菴を訪ふて興趣一段深いものがあつた。花瓶に悪戯の駄文字を刻したりしたのは折角の風雅を損ふものであつたが、土光氏から贈られた抹茶々碗こそは、貴重なる記念品であつた。閑谷翁は備前藩教育、否、日本教育史上の聖跡、今にして初めて訪ふことの遅かりしを恥ぢざるを得ない。教育史的實質は言ふまでもないとして、松山に圍まれた清閑の地域、實にその發名そのまゝである。折井彌留枝氏の岡山保育所を訪ふた。此の保育界の先輩が、その久しい幼稚園の経験を以て、進んで、此の事業に當つてられるのは、豫て是非訪問したいと思つてゐたところである。志を以て幼児の爲に働く人が、いつ迄も永く、その志をつゞけてゐられることは、貴いことであり感謝すべきことである。全国各地、その人を得ることは斯界の欣慶である。

長崎

この夏の旅程の中で、最も楽しみました一つは長崎である。そこで舊識の人々が心を籠めて待つてゐて下さることは、他の土地でも變りないが、相當久し振りであることに

懐しさの一層強いものがある。のみならずもう一つの大きい理由は、嘗てこゝに縣の女子師範があり従つて附屬幼稚園があつたのが、大村の男子師範を土地替へになつた爲に、附屬幼稚園が廢止せられ、それが私の長崎連續講習の三度目の年の翌年であり、その悲しみのまゝ其後此土地を訪ふ機會がなかつたからである。その事件が關係者諸君の心を悲しませたことであつたのは勿論であり、日本に縣立の幼稚園が一つ減じるまいふことで、全國的な問題であつたのである。私も當時の縣當局の無理解を甚しく遺憾としたのであつた。それだけに、その後絶えず、心の底の一隅から忘れ去り難いことであつたのである。ところが、さうであらう。その時の附屬幼稚園主任保姆の伊藤ツル氏は、その後、その幼稚園を準個人的に引受けて護りつゞけてゐるた結果、今度、それが長崎市立になつたのである。之れは長崎市當局の理解、その理解をすゝめた市内保育界の人々の熱意によつたところは勿論大であるが、専心に孤城を護りつゞけた、伊藤さんのまごころこそ、最も大なる理由であつたのである。あの言葉少くはな静かな伊藤さんの、眞に道の爲の強い堅固さに心から敬意を表せずにはゐられない。講習は十三、四、五、大村の女子師範にあり、富田校長の配慮に俟つてゐるが多かつた。同校は一望に大村灣を見晴らす丘上にあつて、恐らく全國稀に見る景勝の校舎であ

る。私は長崎の宿から毎日そこへ通つたので、往返に大村灣の風光を恣にした。

長崎の宿上野屋は私の好きな宿の一つである。こゝしも、いつも同じ室を用意せられたのも旅の心を心安うするものであつた。今度は一切見物をしなかつたが、汐風薫るアバ海岸に於ける保育會長青木市長の招宴、舊知川西知事夫妻の心おきな夕餐の御馳走、その他楽しいプログラムの多かつた中にも、寸刻を惜しむようにして親しみを語つたのは老友下川龍爾氏であつた。下川氏は眞に篤志を以て、長崎保育界の中心になつてゐる人であるが、その變らざる熱心に對しては、常に深甚の敬意を表するところである。同幼稚園の向井マユミさん、市立長崎幼稚園の浦キクヨさん、前記の伊藤ツルさん、皆、私にまつて、長崎の記憶を離れない人々である。又、玉園幼稚園の荒木氏、稻佐幼稚園の松尾氏、肥長幼稚園の馬場氏等、長崎市保育界の貴重さすべきである。是等の人々の協力によつて、長崎保育界の愈々充實し發展せんことを祈つてやまない。

水戸

一旦東京へ引かへして、二十一、二十二日水戸の講習に行つた。それからまた文部省の青年學校要目講習がづく。宿は大洗海岸にまつたが、合憎の雨であの大觀を充分に樂

しむこみが出来なかつたのは惜かつた。こゝは東京附近で得られる波濤の壯觀であるが、それだけに、風雨の夜は硝子戸越しに見る、波がしらの白さが、少々凄過ぎる。水戸に来る度に、我國幼稚園の第一の著宿豊田英雄老女史を御訪ねしたいと思ひつゝ、今度も時間がなくて其機會を得なかつた。お訪ねしたり、東京にお出で願つたりしたのは、可なり以前のこゝになるが、尙ほお元氣であるこゝを、それぐの方面から承つて喜びにたえない。

新潟

二十四、五兩日を見つた。講習の餘暇、郷土博物館を訪ふた。之れは、その前夜、イタリヤ軒の樓上の納涼で、新潟の昔語りが出て、尾崎行雄氏が十七歳の若さを以て新潟新聞の主筆として、縣會の書記長として腕をふるつた話から、英國へ留學して歸つてテムズ河畔の英國議事堂に倣つて、此の信濃川畔に縣會議事堂を建てたといふこゝに及び、若き民主主義の政治家の意氣に興奮を感じて、今の博物館即ちその議事堂を訪ひたくなつたのである。信濃川も埋立て、今は當時の地形が少し變つてゐるが、私はその樓上から川を見下ろしながら、今は古い此五港の若き日を偲んで、新鮮さを感じたのであつた。そこには當時ロンドンから持つて來られたといふ大時計が、今も正しく時を

告げてゐるのである。

私はこの夏、我國の所謂五港を皆訪ふたことになる。そしてその變遷をもいろ／＼に考へさせられたりした。その中で古いキリシタン趣味の長崎も、昔ながらの柳の風情の此の新潟もは、なんだか少々現代から離れた感かしてゐたのであるが、それが、此の新時勢で、支那への出口入口として、二つとも、之れから、もう一度新らしく活動しやうとしてゐるのである。吾々は、その新活動を國のために祈つてやまない。

仙臺

新潟から盛岡へ出るのはい寸不便である。汽車のいゝのを選ぶとすれば上越急行で一旦東京へ引返へして、更に東北本線急行によるのがいゝ位である。たゞそれは餘りに旅の道中雙六の順さして奇妙な感じもするのさ、一寸仙臺に寄つて見たい氣もあつて、のろ／＼山越しの線をとつて、夜に入つて仙臺へ著いた。そして泊りなれた針久別館でゆつくり汗を流して、翌朝、澁谷市長と電話で話をし、加藤市視學とも會つて話をした。話さふのは、此の十月に此の地で開かれる、全國幼稚園關係者大會のことに就てある。出来ることなら此の旅の歸途にでも、もつちゆつくり此の打合せがしたいと思つたのであつたが、その時が得ら

れないので、此の序を利用した譯であつた。その準備はそれ／＼進捗してゐるさいふことだし、是井も盛會を祈つてやまない。

盛岡

盛岡の講習は二十八日からである。二十七日の朝仙臺を立つて、午後一時過ぎに盛岡へ著く。盛岡驛に上羽社會教育主事自ら出迎へてゐて下さつたのは恐縮であつたが、之れは豫てお頼みしてあつたことによつて、此の午後のあき時間を直ぐ小岩井農場へ案内して下さる爲である。小岩井は私が青年時代から訪ねたかつたところである。先年花巻温泉に一夏を送つた時、家族の者には皆こゝを見物させて、私ひとり差支へて訪はなかつた以來、一層の憧れになつてゐた。私は勿論、牧畜のことは全々わからない。只々牧場さいふものが何んだか大好きなのである。之れは青年の時からだが、少々キザな様だが——英國にゐる間も、機會ある毎に牧場を訪ふて、其の味が捨てられなくなつたのである。北海道でも、いゝ牧場が澤山あるが、全國屈指の此の小岩井を訪はないでは、牧場ファンとして氣が濟まないさいふところだつた。何故そんなに牧場が好きなかに理由さいふ程のものもないが、自然であつて野生のまゝではなく、人工が加はつてゐて自然が失はれてゐない。さういふこと

ろが、私の性質にあふさでもいふ譯かも知れない。兎に角、牧場の中に立つミ、此の歳になつても、若い日のロマンチストになれるミところが、我れながらお笑ひものである。但し、そのロマンチストが、此の農場で、しばらくたての牛乳を四合まで飲みほしたことはノマンチストさもないへない御愛嬌である。

盛岡は杜の岡である。高樓から見晴らすミ、四方の景趣極めて味があつて、さか南歐邊の小都市の感がある。今まで此の町へ来て、こうして杜の町ミして見たのは始めてだが、見物は局部だけでなく、こうした全景を味は、なげればならないミ思つた。特に東京人によつては、こうして山の斜面を目近かに見るのは、何んさもないへない。

盛岡で保育のことに極めて關心をもち、大に盡力してゐられた女子師範校長藤見氏が、私のおあひした後だが、岐阜縣男子師範に榮轉せられたことは、盛岡の保育界否東北の上に惜しいことである。願はくは後任校長に於て此の企畫を大成せられんことを。

札幌

此の三年つゞけて来る札幌である。嘗ては、なんだか大層遠いところミ思つた北海道が、極く近いところミ思はれて、夜の連絡線を渡つた。札幌では同行者が初めてなので、

市内外のドライブを共にしたが、幾度來ても、一種變つた味がある。別に何の味さいふでもないが、あの大味なところがいゝ。せゝこましくないところだ。

一晚、梅蔭會の諸君が大勢集つて歓迎宴を開いて下さつたが、旅にあふこうした夕べの樂しさは、何さもないへず嬉しい。こういふ樂しみは各地で與へられるのだが、こゝでは、年々のこゝで御迷惑にも思ふが、又親しさも多いこゝである。もう一つこゝで樂しかつたのは、丁度同じ夜、ホテルの窓から見た月の冴えかたであつた。私の部屋は丁度角の部屋で、一方の窓からは、あの札幌名所の有名な時計臺が真正面に見えて、そこから時間々々の落ちついた響が聞えて来る。一方の窓が丁度月を一ぱいに受けて、その光りがベット一面に流れて来る。あんまり、光りがいゝので、カーテンをおろさずに置いた爲か、此の寢坊も流石に月に浮かされ氣味で、時計臺の音を随分ミ夜更けまで聞いた。たゞそのベットの上的人物が、もつミ細々とした、色の蒼白い程の優形であつたらミ、お月さまに對してお氣の毒みたいであつた。

連絡線の乗り降りの青森は、往きは夜の十一時、歸りは早曉の五時さいふのであつたが、二度さも、櫻蔭會の若い人達が船を送り船を迎へて呉れたことは、誠に深い好意であつた。その中にはみさき會の越山さんが例のピシ／＼し

た若さを見せて呉れてゐた。

東北本線を上野へ直行。此の汽車中で、内閣吏選の報を知つた。九月一日である。

鳥取

九月五日である。鳥取縣岩美郡の倉田村が恩賜財團愛育會から愛育村に指定せられて、その開會式がある爲に、愛育會の理事として行つた。愛育村といふのは縣と村と愛育會とが協力して、その村の育兒事業を完成し、その方の教育と施設とを建設してゆこうとするもので、全國各地方に亘つて選定せられてゐるのである。

そこでは、村の有志、殊に愛育班の會員たる村の婦人や娘さん達が三百餘名集つて、それからの改善を打合せた。實は乳幼児死亡率の甚だ高い村なので、改良といふのは、その點に就てゝある。私は、村の將來の多幸を祈つて辭した。

× × × ×

随分と多く忙しく馳け廻つたものである。夏一ぱいの旅行であつたが、此の時局、せめてもの御奉公も、氣が勇んでゐたせいか、動いた割に疲れを知らないこの夏であつた。それにしても、到るころで多くの方々の好意を受けて、感謝にたえない。旅は私にまつては、いつも、同志友

人巡禮である。

たゞ、どこでもあわたゞしい日程に追はれて、ゆつくりお話も聞けず、其の土地々々を辭したことが、斯うして旅の記を書きつけながら一層の遺憾として思ひ出される。誠に御無禮な巡禮ではある。

ハイ デイ

(第十八回)

津 田 芳 雄 譯

「ほら、フランクフルトからのおみやげですよ」
お医者様は立ち上つて荷物のをばへ行き、解き
にかかつた。ハイデイは何が出て来るかミ、わく
くしながら見つめてゐた。外の厚い包みをほぐ
してしまふミ、お医者様は云つた。

「さあ、これから先きは、自分で開けてごらん」
ハイデイは一つ一つお土産をあけて見た。その
間ぢう、あんまりうれしいのミ、びつくりしたの
ミで、口も利けなかつた。お医者様が又をばへ來
て、大きな箱を開けて、おばあさんがコーヒーミ
一緒に食べるお菓子を出して見せてくれた時、や
つミはじめて、うれしさうに叫び聲をあげた。

「まあ、おばあさんも御馳走がいただけるわ」
そして早速おばあさんへのお土産を包み、今か
ら持つて行つてあげるのだミ云ひ出した。けれど

もおぢいさんは、夕方お医者様を送つて行く時に
連れて行つてあげるから、その時にしなさい云
つた。ハイデイは今度はタバコの箱を見付け出し、
大よろこびでおぢいさんの所へ走つて行つてわ
した。おぢいさんはうれしさうに早速パイプにつ
めて、お医者様ミ二人でゆつくりミくゆらしなが
ら、よもやまの話をした。ハイデイはなほも次ぎ
次ぎミお土産を開けて見てゐるが、突然二人のミ
ころに飛んで来るミ、お医者様の前に立ち止まつ
て、話のミぎれるのを待つて云つた。

「先生、ミのおみやげよりも、やつぱり先生が
いらしつて下さつたのが、一等すき」

大人たちは思はず噴き出し、お医者様は、思ひ
もかけぬ光榮だミ云つた。

日が山の向ふに傾きかけるミ、お医者様はそろ

ノ、籠のデルフリヘカヘリ、宿を見付けようミ、腰を上げた。おぢいさんがお菓子ミ肩掛けミ大きな腸詰めを持ち、お医者様がハイディの手をひいて、三人で山を降りた。ペーテルの家まで来るミ、ハイディは別れを告げた。おぢいさんがデルフリまでお客さまを送つてから、迎へに来てくれるまで、おばあさんのミころで待つてゐるのである。お医者様ミお別れの握手をする時、ハイディはこれが何よりのおもてなしだと思つて、

「あした、山羊ミ一緒にお山へいらつしやいませんミ？」

ミ訊いた。お医者様はよろこんで賛成した。

ハイディはおばあさんのミころへ駆け込んだ。

一等はじめに大きなお菓子の箱をやつミのミこで持ち込み、それから腸詰め、一等おしまひに肩掛けミ、三度もかかつて運び込んだ。おぢいさんはみんな入口のミころにおいて行つたのである。それからハイディは、おばあさんが觸つて見られるやうに、それを出来るだけおばあさんの近くに並べた。肩掛けは膝の上にかけてあげた。

「これね、みんなフランクフルトのクララミおばあさまが、送つて下さつたのよ。」

ハイディはびつくりしてゐるおばあさんミブリギッタに説明した。ブリギッタはさつきからハイディが重い荷物を持ち込むのを見て、さういふミになるのか見當もつかずにぼんやりしてゐた。「おばあさん、お菓子は氣に入つて？、そんなに柔いか、食べてごらんさいよ」

ハイディは何度もさう云つてすゝめたが、おばあさんは、

「さうミも、さうミも、ハイディちゃん、さうしようねえ」

ミ繰り返しながらも、又しても膝の上の温いふかふかした肩掛けを撫でて見ては云ふのだつた。

「寒い冬には、これはほんたうに結構だねえ。こんな立派なものが掛けられるなんて、思ひもよらなかつたがねえ」

ハイディはおばあさんが、お菓子よりも肩掛けの方を喜んでゐるらしいのが、不思議でたまらなかつた。ブリギッタはさつきから、驚きやうれしさを通り越した、殆んミ畏れに近い顔付きで腸詰めを見つめてゐた。今まで一度だつて、こんな大きな腸詰めは見たミもなく、まして自分のものミして持つたミなきないので、自分の眼が信じ

られないくらゐだつた。不審げに頭を振りながら、
「アルムをぢさんに、何にするものだか、訊いて
見なくちやならない」

「云つた。ハイディは即座に答へた。」

「食べるものなのよ。そのほかに使ひ方なんかないのよ」

「ペーテルがこの時飛び込んで来て、

「アルムをぢさんが、今——」

「云ひかけたが、腸詰めが眼に入るさ、びつくりしてものが云へなくなり、途切らせてしまつた。けれどもハイディには、おぢいさんがもうぢき迎ひに来てくれるのだと解つたので、おばあさんにさよならを云つた。この頃では、おぢいさんは決しておばあさんの家を素通りしないで、きつこ挨拶をしに立ち寄つて、おばあさんを元氣付けて喜ばせてやるのだつたが、今日はもう遅いので、ハイディはあしたの朝も亦、雲雀と一緒に起きるのだから、戸口から聲をかけただけで子供を連れて、星空の下を安らかな住み家へ登つて行つた。

十七、御恩がへし

あくる朝、お医者様はペーテルと山羊に案内されて、デルフリ村からのぼつて来た。お医者様

は時々ペーテルにやさしく話しかけて見るのだったが、さうもこの子から一言でも返事を引き出すことは、むづかしかつた。仕方なく黙り込んだまゝ小屋までのぼつて来るさ、ハイディが二匹の山羊をつれて、山の朝日をいつばいに受けて、活ききお迎へに待つてゐた。

「今日は行くぞ。」

ペーテルはいつもの通りに訊ねた。都合を訊くさきも、誘ふさきも、このひさ言である。

「もちろんよ——先生もいらつしやるなら」

ペーテルはちらちらお医者様を横眼で見た。おぢいさんはお辨當袋を持つて出て来て、お医者様と挨拶をしてから、それをペーテルの頸にかけてやつた。お辨當はいつもよりすこゝ重かつた。お医者様が子供達と一緒に山でお辨當を食べればおいしからうと思ひ、おぢいさんは肉を餘計に入れておいたからである。ペーテルはきつこ何か特別の御馳走が這入つてゐるのだらうと思つて、にやにや笑つた。

一行はのぼりはじめた。山羊たちはいつものやうに、われ勝ちにハイディの一等近くに來ようとして、ハイディのまはりに押し寄せて來るので、

しまひにハイデイは立ち止まつて云つた。

「みんな先きへ行つて頂戴、うしろを向いたり、わたしに寄つて來たりしないで、お行儀よくするのよ。わたし、先生とお話し、たいんだから」

それから「ゆき」の背中を軽く叩いて、おさなしくするのよ、と諭した。やつこのこゝで山羊の間をすり抜けて、ハイデイはお醫者様のそばへ行く、お醫者様はその手をひいてやつた。今度の連れのハイデイは、ペーテルのやうなむつゝり屋ではなくて、次ぎから次ぎへ、それぞれの山羊のくせだの、お花だの、岩だの、鳥だの、こゝを、絶え間なく話しかけたので、知らぬ間にいつもの休み場所まで來てしまつてゐた。ペーテルは、お友達を取られた腹癒せに、道々お醫者様をにくらしさうに時々睨み付けてゐるが、幸ひお醫者様は氣が付かなかつた。

ハイデイは自分がいつも坐つて景色をながめる大好きな場所へお醫者様を連れて行き、あたゝかい草の上に竝んで坐つた。峯にも谷にも秋の陽は金いろにかゞやき、大雪原は陽の光りにまばゆく照り映え、くすんだ色の岩鼻が太古さながらの厳かさで、くつきり青空にそびえてゐた。朝風が

そよそよと峯を渡つて來て、夏の名残りをこぼめる風鈴草の花を氣持よさうにそよがせた。頭の上では、あの大きな鳥が、のうのうと羽をのばして青空に大きな輪を描きながら飛んでゐるが、今日はあのしはがれ聲は立てなかつた。ハイデイは首をまはしてその一つ一つを見成つた。ゆれる花、青い空、輝く陽、樂しげな鳥——なにもかも、ほんたうに美しかつた！ハイデイの眼はよろこびに輝いた。そして、お醫者様もこの美しい景色を見てよろこんでいらつしやるかしら、振り向いて見る、お醫者様は深くもの思ひに沈んでゐた。ハイデイのうれしさうな眼に會ふ、お醫者様は云つた。

「なるほごよい景色ですね。——だけごハイデイちゃん、悲しい心を持つて來た者は、さうすればそれがなほつて、心からこの美しい景色をたのしめるやうになるんだらうね」

「まあ、だつて、こゝちや悲しい心の人なんかありませんわ。悲しい人はフランクフルトにだけゐるのですわ」

ハイデイは叫んだ。お醫者様はほゝゑんだが、又まじめな顔になつて云つた。

「だけぎね、もしフランクフルトへ悲しみをすっかりおいて来るここの出来なかつた人があるとしたら、ハイディちゃんはその人にさうしてあげる？」

「さうしていゝかわからなくなつたら、神様にすつかりお話し申し上げればいゝんだわ」

ハイディはきつぱりこ答へた。

「さう、それはいゝ考へだ。だけぎその神様から悲しみを遣はされたのだつたら、神様に何云つて行けばいゝかしら？」

ハイディはしばらく考へてゐた。心の中で、神様はきつこごんな悲しみだつて救つて下さると思ひながら、自分の經驗を思ひ出して、やつこ答へを見付けた。

「ちつこ待つてるのよ。そして、神様はきつこ悲しみから救ひ出して仕合せにして下さるのだから辛棒つよく待つてゐて決して逃げ出したりしてはいけないのだつて、しよつちう自分に云つて聞かせるのよ。さうしてゐるこ、きつこ何かいゝこごが起つて、神様がいつもわたしたちのこごを考へてゐて下さるこごがわかるのですわ。わたしたちは、先きのこごが見えないで今の悲しみしかわからな

いから、いつもさうだき思ひ込んでしまふのですけれぎ」

「美しい信仰だ、いつまでもその信仰をしつかりこ持ちつゞけて下さい」

「お醫者様はさう云つて、翳つて来た山や、日に照らされた谷を黙つて見わたしてゐるたが、やがて又云つた。

「だが、こんな美しい景色を見ても、悲しみに眼がかすんで、ちつこも心がたのしまず、それを思ふこ餘計又悲しくなるこいふやうな人間があるなんて、ハイディちゃんにはわからないだらうね、わかつてくれるかしら？」

ハイディの幸福に満ちた小さな心は、急に彈丸で射抜かれたやうな痛みを感じた。眼がかすむこ聞いて、ハイディはお日様もこの美しい景色も二度も見られないペーテルのおばあさんのこごを思ひ出したのである。おばあさんの眼の見えないこごは、ハイディの悲しみの種で、いつも心にかゝつてゐるのだつた。ハイディは眞剣な聲で云つた。

「えゝ、わかりますわ。そんな時は、おばあさんの讚美歌をうたへばいゝのよ。さうするこ、少しばかり氣がせいせいして来て、時にはすつかり氣

が晴れて、うれしくなつてしまふこともあるので
すつて、おばあさんがさう云つてましたわ」

「そんな讚美歌だらう、わたしにもせひ聞かせて
下さい」

「わたし、お日様と神様のお庭のや、そのほかお
ばあさんの好きなのを、二つか三つしか知りませ
んのよ。おばあさんはいつでもそれをわたしに、
もう一度、もう一度つて、二三べんも云はせるん
ですよ。おばあさんがそれを聞いてゐるこ、のぞ
みこ勇氣が湧いて来るつていふのを、歌つてみま
せうか」

お醫者様はうなづき、ハイディは歌ひ出した。

なやみおそるゝこみなかれ

賢きまもりこゝにあり

神こそ安き汝が柱

人敗るこも神は勝つ

見よ敵兵の逃げ散るを

神の御手もて汝がなやみ

みな歡びにかはれるを

よしや時の間神の愛

消え去りゆきてよるべなき

子等は迷ふこ見ゆるこも

疑ふなかれ 偉いなる

神の慈悲は不變なり

こゝろ靜かに待つものに

神はのぞみを諸きたまふ

ハイディは急に止めてしまつた。お醫者様が手
を眼の前に組み合はせ、ぢつと坐つたまゝ動かな
いので、きつと眠つてしまつたのだと思つたから
である。こんき眼が覺めた時、聞きたいと云へば
又つゞきを歌つてあげようと思つた。あたりは何
のもの音もしなかつた。お醫者様は黙つて坐りつ
ゞけてゐるが、決して眠つてゐるのではなかつた。
遠い遠い昔の思ひ出に耽つてゐるたのである。小
さい子供の時分に、お母さんが肩に手を掛けて、や
さしくぢつと見成りながら、今ハイディの歌つて
くれたあの讚美歌を、よく聞かせてくれたもので
ある。思へばあの歌を聞かなくなつてから、何年
になるだらう。ハイディが歌ひ止めるこ、お母さ
んのなつかしい聲がつゞき、なほもはるかに思ひ
出へこ運び去るのだつた。長い夢想から醒めるこ、
お醫者様は、不思議さうに自分を見つめてゐるハ

イディミ眼が會つた。

「ハイディちゃん、ほんたうにいゝ讚美歌だつたねえ。又こゝへ来て聞かせて下さいね」

ハイディの手をさつてさういふお醫者様の聲には、さつきまでなかつた嬉しさうな響があつた。

ペーテルはさつきから、むしやくしやしてたまらなかつた。ハイディはもう幾日も一緒に山へ來なかつたのに、やつミ來たミ思へば、お醫者様さばかり話し込んでゐるので、腹が立つて仕様がなないのである。たうミう癩癩を起し、お醫者様のうしろに立つて、拳骨をかためて打つまねをした。いつまで経つてもハイディがお醫者様のそばを離れないので、果ては兩手で拳骨をふりかため、益々ひきく打つて見せるのだつた。やがてお日様が頭のま上に來るミ、聲をかぎりに叫び立てた。

「晝めしだよーオ」

ハイディがお辨當をまりに立つて行かうとするミ、お醫者様はおなかとすいてゐないから、お乳だけもらつて、もつミ上の方までのぼつて見たいミ云つた。さう云はれて見ればハイディもおなかとすいてゐないので、やつぱりお乳だけにして、お醫者様ミ、いつか「ひわ」がもう少しで轉がり落ち

さうになつた昔の生えた大きな岩のミころまで案内するミにした。そこで、ペーテルのミころに走つて行き、わけを話してお乳を二人分しぼつて來てくれミたのんだ。ペーテルはなかなか呑み込めなかつた。

「そいぢや、あの袋の中のお辨當は、誰が食べるんだい？」

「あんたにあげるわ。だから、早くお乳をしぼつて來てよ」

ペーテルがこの時ほきてきばきミ仕事をやつてのけたのは珍らしいミだつた。勿論、袋の中のお辨當目當であつた。二人がしづかにお乳をのみ始めるが早いカ、ペーテルは袋を開けた。肉の大切れを見た時は、うれしくつて軀が震へた。けれども取り出さうミした途端、はつミして手を引つ込めた。こんな御馳走をそつくりくれた親切なお醫者様に、自分はさつき拳骨を振りまはしたミを思ひ出し、氣が咎めたのである。急に飛び上るミ、さつきの所に駆けて行き、もう決してあんなミはしないさいふしるしに、兩手をひろげて、氣のすむまで差し上げておいてから、さもおいしさうに、せいせいした氣分で御馳走を食べた。

日本幼稚園協會編輯 幼兒の教育

會長 東京女子高等師範學校長
 主幹 東京女子高等師範學校教授
 附屬幼稚園主事
 倉橋惣三
 下村壽一

日本幼稚園協會規則

第一條 本會ハ幼児教育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第二條 本會ハ日本幼稚園協會ト稱ス

第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼児教育ニ篤志ナルモノトス

第四條 會員ハ會費トシテ一ヶ月金參拾五錢ヲ齎出スヘシ、會員ハ無料ニテ本會發行雜誌ノ配布ヲ受ケ又本會ノ事業ニ關シ諸種ノ便宜ヲ受ケ

第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルトキハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルヘシ

第六條 幼稚園ニ關係アルモノニシテ本會ノ事業ノ爲ニ特ニ盡力ヲ與ヘラル、モノニ請ヒテ地方委員トナスコトアルヘシ

第七條 本會ハ毎年一回總會ヲ開ク。但場合ニヨリ臨時休會スルコトヲ得

第八條 本會ハ左ノ事業ヲ行フ
 一、幼児教育ニ關スル研究及ヒ調査
 一、幼児教育ニ關スル講演會及ヒ講習

會ノ開催
 一、雜誌發行(毎月一回)
 一、幼児教育ニ關スル圖書刊行
 一、保姆就職及招聘ニ關スル仲介
 一、其他本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件

第九條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
 會長 一名 會務ヲ總理ス
 主幹 一名 會長ヲ補佐シテ會務ヲ掌理ス
 幹事 若干名 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス
 評議員 若干名 重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ス

第十條 會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス
 主幹 幹事 評議員ハ二ケ年ヲ期シテ會長ヨリ推舉スルモノトス
 第十二條 本會ハ必要ニ應ジテニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ル、コトアルヘシ
 第十三條 本規則ハ總會出席會員ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラサレハ變更スルコトヲ得ス

定規文注

一、本誌御注文の方は凡て前金(郵税共)で願ひます。(郵券代用の方は是れは換替貯金で振替口座東京一七二六六番日本幼稚園協會宛に願ひます)

一、送金の節には第何巻第何月號より第何月號迄と明記せられたし。

一、本誌の代金に對しては別に領收證を差出しません。特に御入用の方は往復はがきで御申越を願ひます。

一、會費切又は前金切の際にはその最終發送の雜誌の帶封に「前金切」の印章を押捺いたしますから其節は早速御送金を願ひます。

定價

一ヶ月分	金參拾五錢	特等面一頁	二面一頁
半年分	金貳圓拾錢	金貳圓	圓金拾圓
一年分	金四圓貳拾錢	金拾圓	圓金拾圓
拾貳冊送	料共	金拾圓	圓金拾圓

告廣
 神田區駿河臺ノ三田廣告社に御申込下さい

(外國行郵税は一部金拾貳錢の割にて御拂込下さい)
 昭和十四年九月二十八日印刷納本
 昭和十四年十月一日發行
 幼兒の教育 第二十九卷 第十號

不許複製 禁止轉載

編輯者 倉橋惣三
 發行所 柴山則常
 印刷所 杏林舎
 東京市小石川區大塚町三十五
 東京女子高等師範學校附屬幼稚園内

發行所 日本幼稚園協會 振替口座東京一七二六六番

定規文注

一、本誌御注文の方は凡て前金(郵税共)で願ひます。(郵券代用の方は是れは換替貯金で振替口座東京一七二六六番日本幼稚園協會宛に願ひます)

一、送金の節には第何巻第何月號より第何月號迄と明記せられたし。

一、本誌の代金に對しては別に領收證を差出しません。特に御入用の方は往復はがきで御申越を願ひます。

一、會費切又は前金切の際にはその最終發送の雜誌の帶封に「前金切」の印章を押捺いたしますから其節は早速御送金を願ひます。

一、本誌の見本御入用の場合には前金參拾五錢發送を願ひます。

屋外保育用品

備へあれば憂ひなし、日常遊びのうちにも、
幼児の體位向上をはかるは喫緊の急務！

◇反馬——堅牢無比の構造、昔からある幼児用のもの、前後に動搖し乗心地爽快にして安全

一 臺 金六圓

◇行進タンク——豆戰車の形、十個以上の車で上體を前後に動搖させるに前進する。

一 臺 金十五圓

◇行進木馬——乗つて手綱を引くに前進開始、熟練によつて速度を増す。

一 臺 金七圓

◇押車——幼児が自由に押し歩く運搬車、多種多様に應用し得

一 臺 金六圓

◇トロツコ——車心棒も堅牢、子供に種々應用し得らる。

一 臺 金六圓

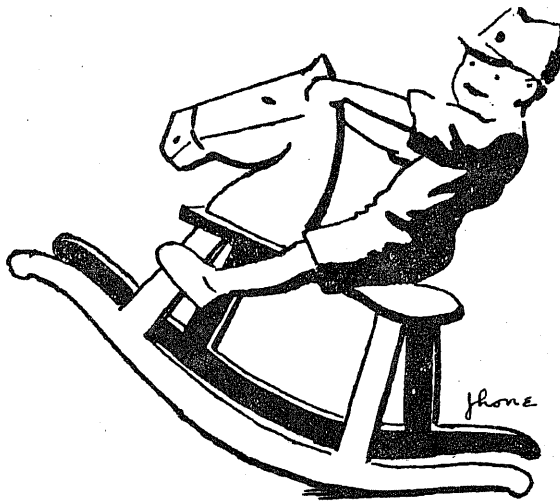
◇携帶黑板——幼児自身で適宜の所へ持ち運ばれる自由な折疊式(物品税の賦課なし)

一 組 金二十三圓

◇折疊桌子——堅牢な蝶番で折疊み自由、高サ一尺五寸長サ四尺幅二尺(物品税の賦課なし)

一 脚一組 金十二圓

その他幼稚園託兒所用各種運動具、木製保育用品各種



株式會社 レーベール 食

本社 東京・神田・保神二町(33)電話 六三六六番
支店 大阪・東區・備後五町(24)電話 八三九一番

昭和四年五月十五日第三種郵便物認可
(毎月一回) 日發行
昭和十四年九月二十八日印刷納本
昭和十四年十月一日發行

定價參拾五錢